特43
97

實説名畫血達磨下之巻

東京　柳葉亭繁彦補

第八回　數馬の部屋に忍むで袖助義を盟ふ

さても併南數馬の袖助より送りし艶書をひらきもせず休息をけるがたゝ何とあく胸ちさわぎていろにかゝりていも寐られずうつ〳〵として夜を更しけるまゝ紡かゝかの上書を取いだしてその上書を見るゑ當世類ひあき能筆おりしかゞ數馬元來筆道を好みける故目もとめたず打返して見てありしがよくこゝろをゞ先ておもひ見るゑ彼ひと戀慕のやるかたなきに主人へいとまを乞わざ〳〵當家へきたりをものにや假令心ゑゝ去たがとすとも此手跡のやうすを見ざらんも情おきに似たり所せん披見のうへ斷りの返書を送りこの芳志を謝すべしと了簡して封じめとく〳〵ひらき見れゞ大師樣の走りがきいとめでたくやまと唐土のたとへをひき切なる思ひのたけをとの薬の上に句とせゐとれにいみじき書したゝめ摺のためとて血判をするゑておくに一首のうたあり「うと

實説名畫血達磨下之巻

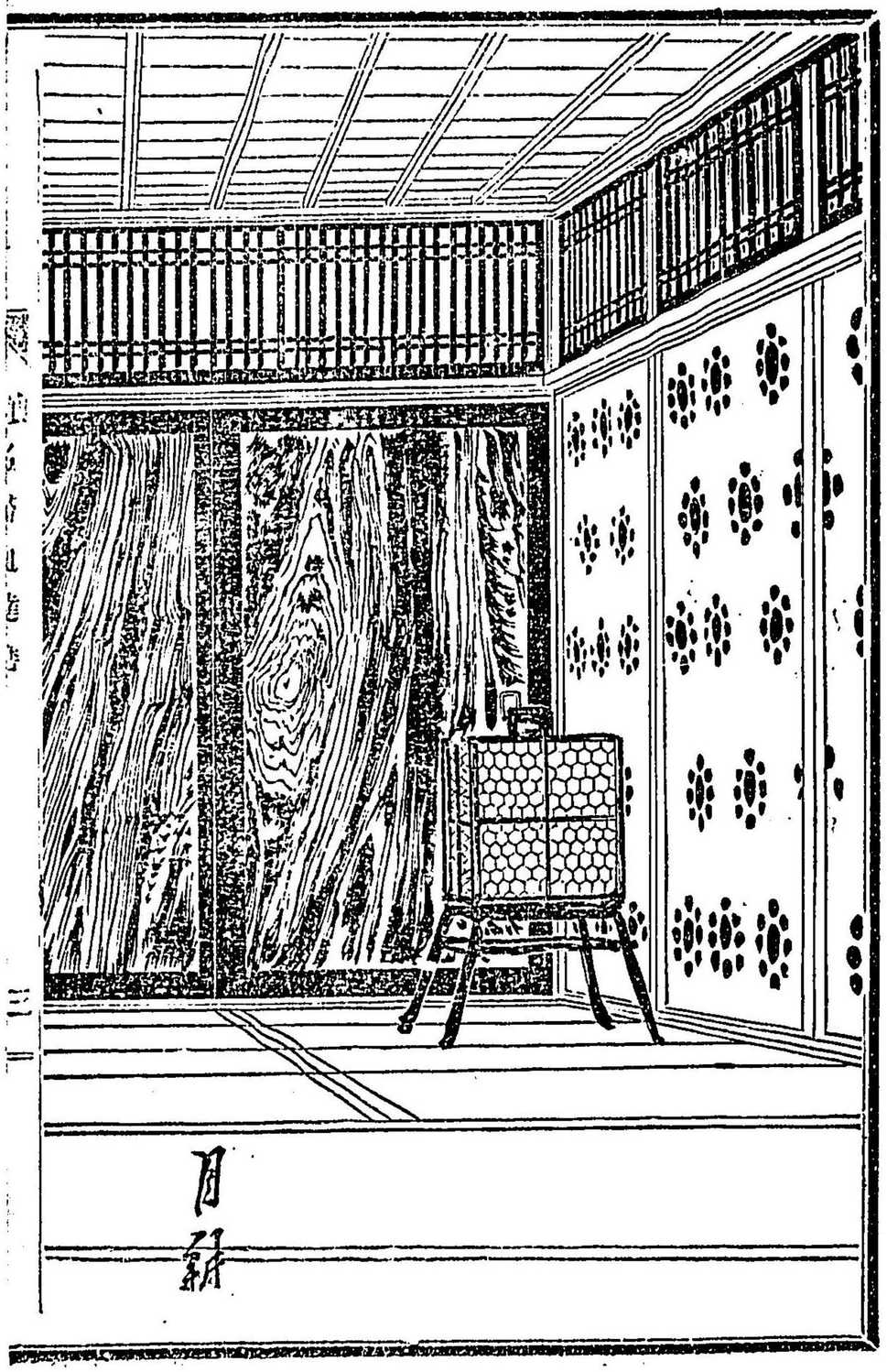
東京　柳葉亭繁彦補

第八回　數馬の部屋に忍むで袖助義を盟ふ

さても伊達數馬は袖助より送りし艶書をひらきもせず休息をけるがたゝ何とあく胸を
ちさめさせいろに かゝりていも寐られずうつ〳〵として夜を更しけるまゝ窃かあかの
上書を取いだしてその上書を見るゑ當世類ひなき能筆なりしかゞ數馬元來筆道を好み
ける故目もとあたず打返して見てありしがよくこゝろとゞめ見ておもひ見るゑ彼ひと
穏藤のやるかたなきに主人へいとまを乞わざ〳〵當家へきたり去ものにゃ假令心ゑい
去たがとずとも此手跡のやうすを見ざらんも情なきに似たり所せん披見のうへ斷りの
返書を送りこの芳志を謝すべしと了簡して封じめとく〳〵ひらき見れゞ大師様の走り
がきいとめでたくやまと唐土のたとへをひき切なる思ひのたけをこの薬の上に句とせ
なとれにいみじき書したゝめ報のためとて血判をするゑておくに一首のうたあり「うと

むあよ逢ぬおもひにくずおれてかげのごとくよあれるすがたを」とまたゝめけり數馬ハ若年なれども和歌の道にも心ざし情をもわきまへこゝろばへやさしき性質あれバ此手跡と一首の歌よ心うけり始めよりよしある人と思ひしが我ゆゑにかほどまでよ艱難辛苦あしたまふをもかへりみず慕ひたまとるこゝろざしてそうれしけれとおもとずも雨眼に泪をうかめかくのごとく根づよく慕ひたまふを情けなき返事せばいかなるわが身のなんぎとあらんも計りがたしとおもふふ人品骨柄他ならず其こゝろざしの大丈夫たのもしげある人あれバ銘々に招きてわが身のうハをもとあし大望成就の力とたのもあべよき助けともなるべし然らバ今宵人しれず我部屋へしのばせ懇ろある心ざしを謝せんものをとおもひきはめ料紙とり出で返書をさら〳〵としたゝめこよひ巻六ッすぎわが部屋へ忍び來たまふべく心ざしの程もめん談の上よまをしうけたまいるべしと書て其興にかくあん一首とのせたりけり「またいかゐむすびかくらむ小車のこゝろのひいゝとけよしものと」と書つらね人目をしのびゝそかに袖助が方へおくりけるに

ど袖助ハこん日一書を送りてよりいろよきへんじはるか若もあきとき八殿の御聞にも達すべけれバわが身の存亡今明日の内あらんと覺悟をきめまちたりしところに早速返事きたりしかバとる手もおそしと披見するに友右衛門の心ざしを悦びきこへ繁き人目を忍びて今宵わが部屋へまふ來給へかし委細八對面の折にあそ萬づ語らひまゐらせん抔あはれふかく實をこめし鳥の跡ありしかバ夢かうつゝか添じげあやと天よものぼるこゝ地にて日頃の大願成就せりわが艱難も益ありしとて大ひによろこび暮六ッまでハわづか一時ばかりありしも千年を經るおもひにていまや〳〵と待うちに冬の日脚のいとみぢかくはや時刻よもありけるゆゑ袖助ハ衣服をあらため以前の大小を帶し立派によそほひ今宵を千夜の始めとして睦み語らんものをとあゝろ悦こびゝそかに數馬が部屋へしのびゆきけれバかの數馬も疾くより俟わびけん袖助が來ると見て物をも言ずあつことと打咲ゐしやくあして手をとり居間へ伴あひ日頃の艱難辛苦の禮をのべたこゝろざしの忝け無きに斯く懇くも招き奉りたれバ打寛ろぎて物語り玉へかしと云ふ慶



いと可愛し袖助い今數馬の詞を聞て一命をひろひし如くに思ひ始終のわけを語りいで て愛をあぐさめけるが數馬頓て容と改め寔に數あらぬ某を祿にかへ身を賤しめても戀 慕ひ給はる浮心ざし決して等閑にい思ひ奉らざれ其某もまた武士の家に生れ君のは高 恩に浴する身と以て不義の契りと結ばゝ丈夫たるの甲斐も無くて當世に寵じらるゝ色 子の類ひと伍を爲ん事口惜しき次第よ侍り且亦は身も蓋世の義勇ある豪傑と見受け奉 るに男色龍陽の果あき業ゐ祿を棄身と輕しめ僅かに本意を達せしまて弓矢八幡武士た るの本望にいよゝ有らじ古しへより意氣相投じ或ひい父子とあり又い兄弟とあり身を 殺して盟約を遂へざる者あるときい後世の人何れも義人と稱へて其志操を賞するにあ らずやは身實ゐ某しを愛し玉いゝ果なき契りを結ぶ事を爲ぞしては身の子とも弟とも 愛し給いる可く某しも亦は身をもて親とも兄とも見奉りあば世に賴母數事あらんにた ゝ知らずは身の御心如何よゞやと道理を盡して說出る年に稀ある賢しき詞に友右衛門 い無明の夢の忽ちさめ背ゐ汗して漸くに云ひ出るやう思ふにましたるは身の議論我 盡く承諾せ身一旦武士の思ひ込み身命ゐ懸て慕ひし事も今日不憲面會して親しく詞と 通いしたをば是にて宿望い稍や晴たるに何んぞ不義の情慾を逞しふしては身を辱しめ んや応やすかれ數馬どのとてさしも戀ひ慕ひたる思ひと斷然ひるがへし想つて再びは 身に迫るまじと云ふよゞ數馬大いによろこび猶これかれの物語りに時と移し互ひの心 解け合ひて終に兄弟の盟ひを結びける其上にて數馬いわが身のうへの緣とつゝまず父 の横死の緣あらびに母の遺言の次第敵討の大望あることいもくわしくかたり何卒ちか らとありて下さるべしと餘義なくたのみけるよゞ袖助も大きにおどろき感応しさても 〳〵若輩にい健氣の所存かゐ天晴稱美にたへたりかく兄弟の契と結ぶ上いわがためよ も親の怨ありいかにも亡母の遺言の如く亡父の事實の汚名とそゝぎ敵の行衛をもたづ ねもとめ首尾よく本望を達せさすべし我一命のあらんかぎりい力をろへともく〳〵に敵 の實否をさがし聞べく間かあらずく〳〵こゝろ安かるべし大丈夫の一言違せぬ證據かく のごとしと刀を抜て金打しければ數馬世ようれしくたのもしくかゝる丈夫の後盾を得

たまいる事もこれひとへに觀世音の示現あるべしとさのふの靈夢のやうすと物語りしたりしかば袖助大ひよ感じ誠におもひあはせし事まそあれいつぞやは身を去たひ日毎ゐ淺草觀音へ詣で去かども逢見る縁と得ざりしゆゑもつたひあくも觀世音を恨と奉りおもはず本堂にてまぢろみしにたちまち人來りてわれを起し細川どの參詣あり靈前を退けよと申せしによつて扨い心身つかれてまどろみるるか面目おき次第かなと赤面しながらかたとらにしりぞきやすらひ居るにその日は身と見る縁を得たり夫迄い何方の人といふ事としらざりしがその日にいたりて細川殿ゑ奉仕のことを知りたるい則はちこれ觀世音の恵ならんと有難くおもひ主人に暇を乞うけて直ぐさま當家に來りしゆゑゐこそ終ゑこの對面ゑおよびしなれば身さのふの夢想といひ一かたならぬ奇縁あらんとよろこびの泪と催しければ數馬もいよ〳〵たのもしく信心膽にめいじておかへ稲くさ〳〵の雑話ゑ時を移せし處に門番所より品川少將どのは出なりと呼とりけるこれい今日細川どの登城の節殿中におゐて品川豊前守殿對面ありしが今宵夜遊せんとの

やくそくありしゆゑ也これによつて數馬も直ちゑ出勤すべきよし申來りければ袖助はわて驚き我部屋へ歸らんとすれども客來につき人目繁ければ出る縁あたはず數馬も途方ゑくれて居たりしが夜中の義なればざんじの響應あるべし去かれば窮屈あがら去ばらくこれにしのび居たまへとて數馬が衣類など入おく長持の中へ袖助とかくしいれその身い支度をとゝのへこゝろのこれど是非もあくそのまゝは殿へ出勤せしが細川どの夜遊のもよふしに依て品川豊前守どのゝ參らるゝ約束ありし事をば去らざりしゆゑゐ袖助をひそかゐわが部屋へ招きしにこの客來に驚きやう〳〵に袖助を長持の中へ隱しおきては殿へいで給仕配膳を勤けれ共餓の事あがちさま〳〵のもてなしにて酒宴も時移り夜半ごろにもありけるにぞ數馬い風とこゝろ付きかの袖助殿のとゐしゐ物まりうれしさのまゝ畫より食事をもせざりしよし申されしが嘸々空腹におわすらん何をがあ參らせたしとあたりを見まわすにこなたの違ひ棚に餅菓子のありけるゐぞ是幸ひの事ありとて其内にて羊羹二ッ三ッ紙ゐ包み懐中してわが部屋へ行かんとせしゐ慌たゝ

しく座敷より呼たまふもあるのまゝ此前へ罷りいづるに細川殿客へもてあしのため數馬わ酌仕れと命じられしかばかしこまつて銚子を取特品川どのにすゝめ奉らんと彼是立まわりし機會いかゝしけん懐中せし以前の羊羹ころ〳〵とおちけるまぞ數馬いとゝ赤面して何と陳ずべきやうもなく消居るやうにおもひなり朋輩の小姓ども氣のどくにおもひしうども此前の事にもありければ取すてべきやうも叶とず俱よ手に汗と握つてひかへ居る細川どの甚だいかりの色氣色にてすでに手討共おもとれしかども客への手まへもありと不快の顔色わて白眼付たまふを品川どのも手持あしく見へるがとりあへずものに紛らしその場をおさめ夜も深更におよびたれば今宵の酒宴い是にて此納め給いるべしといとまを告げてのへられける其跡にて細川どの近習の士と呼いだしたまひ數馬と預けたまひわれ日頃かれを愛する事お客においても存じあるにあれある座しきにて尾籠のふるまひ言語お絶したることどもなりかゝる不行儀のものを愛するやと客仁のおもとくも恥かしき次第にてわれにまで恥辱と裝らしひる事そのまゝにすて置がさし夜あけあば手討にあすべきあひだ急度あづけおくなりといつゐあきらの憤のていにて其儀寢處へ入たまふ近習小姓もおそれ入りあにと詫言中さんやうもあくもだしがたしとて數馬と一間あるとまろへ押こめ近習の者番人となつて守りけるむざんやあ數馬いはからざる禍おわひて夜あけば手討との事なりしかばわづかよ二時計りの存命にて屠所の羊にことならぬ死をまつばかりの身とありしに正躰もなく唯ひとりふし沈をつゝうちあげき死する命いをしからねど五才や六ツの其ころよりおもひこんだる大望をも果さず其上母の遺言にもたがひ殊おい袖助殿の身の上もいかゝなりゆき給ふらんとかれまれおもへば身も世もあられず私しごとに主人の目をしのびたる天罰にやとそらおそろしくもかなしくてゝゐたてまつとふり袖を口にふくみて喰しばる心のうちぞあれなり程あく其夜も明しかば細川どの出たまひ日頃寵愛のふかゝりしも數馬が艶色美麗のゑにもあらず行儀作法立居ふるまひのたゞしきと感じたまひしゆゑなりしに夜前の所爲匹夫下賤のふるまひありとおもひ取くしみはおはだ深く

せひ〳〵手討よいたさんとて椽先へ引出すべしとありしかゞ預かりし人々かしこまり是非あく數馬を彼椽先よ引据しに身の過失とい云ひあがら俱不戴天の父の讎敵をも討あたいず臨終に遺せし母の盲樣も空しくなし葉末の露と消ゆくぞ九ッの世を代るとも たゞ是のみが遺憾しとて夕べ夜一夜泣明せしが素より賢きものあれゞ中〳〵よ思ひ究め少しもわるびれず殿の彼前に平伏あすと大守も今更に便あくや思しけん憐て數馬に向ひ申されけるゝ汝平生のぎやうぎゝ引りへ心の外ある夜前の仕業何とも以て合點ゆかずよも汝ぢが食すべき爲にひそかに懐中せしにいあるまじ定めて子細ぞある事あらん分疏あらゞ具直に申べしとありしかども數馬い頭をあげて有がたきは詭にい候へども此期に及び何事をか申上候はんいづれにも遁れ難きわが身の上にて候まゝ此上の彼慈悲よい早々に死を給いりとのゝ彼手よかゝり相はて候事最期の本望是にすぎざるべくあいれ日頃の彼情けをもつて生前の願ひ彼聞とゞり下し置れあゞ上あさ彼高恩とこそゝんじ奉るべけれたゞ〳〵すみやかに一命をめしあげられ下さるべしといさぎよく申けれゞ細川殿是をきゝたまひて流石い武士の家に生れし其方覺悟の躰い神妙なれどもあんぢ食物のたゝに一命とすつるときい匹夫下賤に異あらずとて指頭のあざりを受る死後の恥辱をおもいおやと申されけるにぞ數馬これを聞りてたちまち面色朱のごとくにありてしばらく落涙してありけるがやゝありて頭をあげ涙を振袖にてはらひて云ふやう只今の彼意のおもひきはまりの事よかたじけあく骨身あこたへしのびがたく候へゞ子細を具に申上奉らんえかし彼鵜に達し奉れゞ一しほ彼怒りもまし候はんとおそれ入候事あがらざんげにい五逆十惡の罪も亡びるとうけたまはり候得ゞあからさまに申上ひはんとて我身の大望父母の最期の始終より袖助が事主君の彼目をかをゝ先ひそかにまねきし事も大望成就の後楯ゝ頼みたき心底なりしよし幷に前夜彼客によつて部屋へ歸るべき便りあくせわしきまゝに長持の中へかくし置けるところきのふ盡より一向に食事もいたさずとうけたまいり候故その飢餓をたすけんとの爲め夜前の所業におよび候しに斯くの如く我身より露顯仕りし事いやつたく彼主君の彼目と竊め奉り

たる皇天の御咎めあらんといとさらにおそろしく存候につきていわたくし罪い自殺
自滅に候得ばいかやうなる御刑罰を蒙り候ともいさゝかも御うらみまをし上げべく
義に候いねどもかの人も諸ともに死を蒙りしいんことといと便なくもなげかはしくぞん
じ奉りさりながら是非あさ次第に候間何卒とやく死とたまはり最期の苦悩を御救ひ
下さらば此上の御厚恩ありがたくぞんじ奉るべしと有のまゝにちりともつゝまず申上
けるにぞ細川どの始終のやうすとき給ひ居られしが當時天下の三諸侯と稱し來りた
る程の明君あれば甚々御稱美ありて若年にい健氣げのものありとてゝたく譽たまひ其
趣一々口書を申付られさて其上にて宣ふやう大川友右衛門事袖助義も數馬が當の相
手なればいづれにも懸合い免かれがたし疾く呼出して實否を糺し懲罰の沙汰に及ぶべ
き間早く長持取寄べしと申渡されけるよぞこれによつて御近習等の面々いそぎ數馬
が部屋ゑ馳せゆき彼袖助が隠れ居たりし長持とゝ舁出しろの儘大守の御前へ持いで等
しく左右ゑ居ながれて大守の御沙汰と手に汗握り片唾を呑んでうかゝひけり

○第九回　罪を輕くして仁君良臣を得る

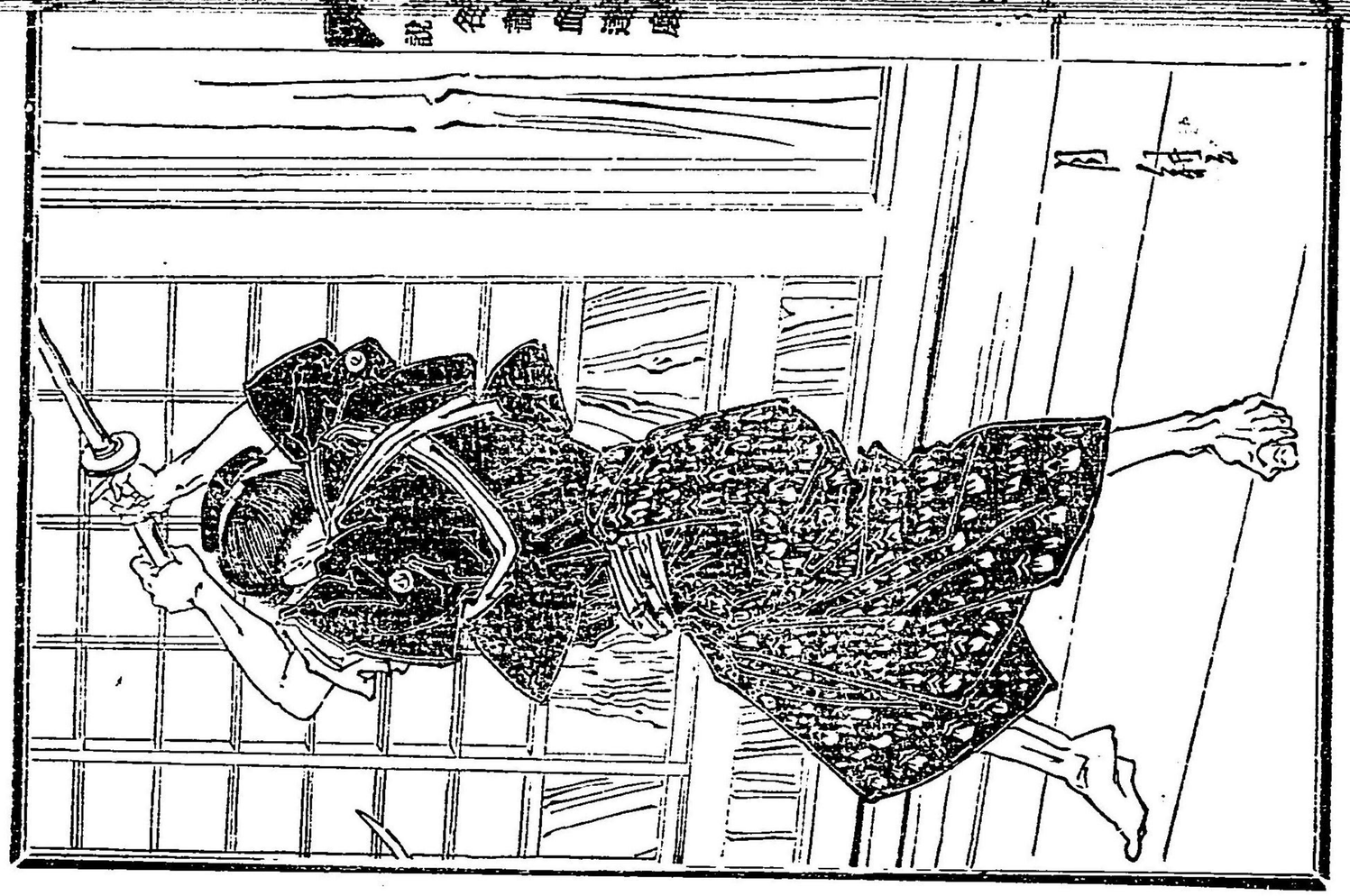
さるやゝに伊南數馬が白狀ゑよつて細川どのい袖助をも呼出し尋ねべしとて役人に命
せられしのゝすゑはち數馬が部屋よりくだんの長持かき來りふたおしあくれゝ袖助偖
い事みな露顯せしかと一ト度い驚きしが素より覺悟の事なれゝ少しもおくせし氣色な
くゑづかに出てひざまづきお尋ねあらんと待ち居たるを殿の御前ゑ侍りたる御近習の
一人が大守の仰せを承り袖助に向ひ申けるい汝ぢ數馬がいさゝゑふ白狀のうへい尋問
ふべきゑもあらねども一應取糺すあり果して覺悟ありやと申けれゝ袖助謹んでうけた
まとり靜かに頭を擡げて云ふやうもつたいおくも殿樣の御目とかすゝかくなりゆき候
事是非もこれなき事にしておそれながらそれがしが心をつくし候だん一朝一夕の事に
候いず秋元家ゑ奉仕いたし大川友右衛門と申せし時よりくだんの執心やむ事を得ざり
しによつて食祿と捨て中間小ものとまでに身を賤しめ辛苦艱難をしのぎ候ひて既に前
夜彼ゑ出會あせしに道理を以て之を拒を我が無道の情慾とといめい事年に稀なる怜

悧發明わ感伏あし望みを遂ずして戀慕の思ひと斷ち義信を通じて兄弟の盟ひを結び不義の行ひい少しもあらざれ共忍びて彼が部屋に赴きたる某が初念を惡くまさせ玉いいかあるは刑罰に處せらるゝともうらみ奉るべきやう更にこれなく刀の錆い身より出るとやらんにて某しが自ら招きしおのれと作れる罪あれバは大法におこあい下さるべしと色とも變せず明白よのべげるにぞ細川殿はるゝにそれをきゝさまひ其大丈夫ある心さしを感じ思し殊よ平生諸士等が取沙汰にも器量ある者ありときゝおよびたまひしかバ少しもいかりたまふは氣色あくかれが身の上の始終申せし事ども口書にいたすべしと申付られしかバ役人すあはち袖助にたづね數馬を見そめしより秋元家を立さり當家へ中間奉公よすることみし次第より前夜のやうすまでわからさまにのべげるおもむき口書を認め大守のは前へ差出しけり細川どの其口書を見給ふ數馬が申せしにすこしも違はざりしかバ去ばらくは思案わつて袖助にむかひのたまひけるいおのれ袖助といふ下郎の分としてりゝる大罪ををかしたるくせもの唯今手討にあすべきぞさりながらも

と大川友右衛門といひし大丈夫の勇士われ見處あれバあらためていまより引わげ家來とあしめし仕ふべし汝ぢ奉公を予にいたすべきや否とありけれバ友右衛門い夢見しごとくにてこれいかにめうがもまたおそろしき侵意を蒙むるものかあさらに實とい存じ奉らず候とぞ申けれバ細川どのわつことうちわらひ給ひなんぢ訝事なかれむかし唐土漢楚の軍よ沛公を追かけし丁公雍齒貳人丁公い沛公とたすくべしと申けるを雍齒きかず生捕にせんと追うなしが沛公運强く其場をのがれ終にそのゝち楚をやろぼして漢の代とあし高祖と仰がれたまひしかバ丁公雍齒も後にい漢の臣下とありにけり時に高祖これを所置したまふにはじめにわれをたすけんと云し丁公を誅しまた殺さんと云し雍齒とたすけ置れしも武士い一心の變せざるをこそ大丈夫と稱美する謂れ也汝ぢが不敵の振舞わがまゝろによくかあへり山にのぼりてい谷の深きをしらずとかや今かやうの事抱をいたさずんバあんぢが器量を見る事あたふまじこゝろをやすんじ我に仕へて忠を尽せよと申されけれバ友右衛門い阿とばかりに平伏あし殿のは仁心骨髓に徹し名智

の詞ゐ感涙をながしたゝしばらくものをも云いずして只三拜九拜して居たりしがやゝありて口をあげ扨々ありがたしとも添なしとも言語よつきし慈悲の心意を蒙ひるものかな其ほ厚恩を報じ奉らんよりも輕き此命とあげうりて主君公仕り候はんさりながら食祿ゐおひてい萱合も頂戴仕り難く候也此ゆゑい古主秋元家と退去の砌り応願の筋はれあり暇と乞ひうけい得ども他家へ仕へて食祿い咄たりとも受まじきむねに誓紙をさし出し置いゆゑその手前もそむきがたしよつて食祿いいくへにもほ死を蒙りたくどんじ奉ると申けるにぞ細川どのほきゝあつてもつとものあれども汝一旦罪科あるに依てわが手にかけて打殺たる袖助とゆらためて大川友右衛門とゐし召抱へひとするになんの遠慮におよぶべき去かしながら汝が心の落付爲め我方より秋元ぞのへ使者をもつて申入れ其誓紙を申請とらすべしさて又數馬いわれおもふ仔細われば今日勘當申渡すあひだ其方不便をくわへよきに計らひ得させよと申渡されけり是い數馬が白狀ゐ親の敵を討たきのぞゝある事を申せしゆゑ友右衛門ゐ預け劒術兵法怠り

あく教導うせんさえの慈仁恵也數馬いとても通れぬ一命と覺悟さわめてありし處おもひがけあき殿の慈あさけに依て一命を助かるのみならず友右衛門が罪をも免されてあらたゐ家臣に抱へ入られんとの事ありしかばかゝかり深きほめぐをゐとかういふべき言葉あくたい手を合せて伏おがみ伏おがむより外はなかりける然るに大川友右衛門いわが身はぞんじよらずかやうに殿の慈見出しゐ預りありがたけれども數馬義慈勘氣とうけし事深きほ仁恵あれども大守の思召を未ださとらねばひたすらあげきおもひしかどもすでに誅せらるべき命を助けたまとるほ厚恩あれゝいまさらほ詫言申さんやうもあくかしこまり奉り候とて數馬とともあひ去りぞき我部屋にかへりける爰において細川殿より直ちに秋元家へ使者をおくられ段々の子細とゆれべらを大川友右衛門事拙者方へたまとりたき旨懇に所望せられての事慈承知ゐおひてい渠がさし出し置たる誓紙もこれまた申請たき段いさゐゆ述たりけるにぞ但馬守殿にも友右衛門事余儀ゐき願につき一たん退去の處を聞とゝいけられもつとも本望と達し候上い再び歸り來るべき



やくそくあつきこゝろまちして居られし處に友右衛門を所望の段ヤ越されしかバ但馬守殿よりも殘り多くはおもわれけれども又細川どのより申越れし趣意も餘儀あく聞へけれバいまと申も氣の毒あり殘更友右衛門身よりとりてい出世の筋にも候得者それと妨げんも本意あらず其上譜代といふほどの事よりもあらず侍いわたりものといへバ細川どのゝ所望にまかせこゝろよく承知の返答すべしと丁節あつて則ヤ越れし二ケ條のをもむき承知いたし候不束ある元家來太川友右衛門所望の段拙者におひて大慶これに過ずかつまた渠よりさし出し置たる證紙の義も委細に相心得すあとち進上いたし候ありとの返答なりしかバ細川どの甚々よろこびあつて然上い勤相應のあてがひをあたへずんバあるべからずと新規百五拾石さのみとり側奉公並に申付られけり此時家老中申けるは細川家へ仕へるは家來の苗字に大川と申はいかゝあり改名させ去かるべしとの評議ありける時一人のいはく彼が代〳〵の家名此方よりあらたむべしと申渡すはいかゝあらんかの方より遠慮にてあらため申候樣にとりとからひもあるべきとヤにつきなるはど此義もつともあるとてある日をもつて内々その段沙汰に及びけれバ友右衛門はとりあへず

谷々の流れのめぐみ闕入れてうへい細川したい大川と一首の狂歌よて返答申けれバ大守とゝヒ家老中ともに大ひに感心しかへつて賞美とうけ變苗の沙汰と止みけるとぞかゝれば大川友右衛門ハ死罪にも處せらるゝを細川どのゝ明察を以て万卒い得易し一腹い得難しと云にあぞらへ兩人の罪をゆるし友右衛門をバあらためて臣下にしたまひたる事あれバ其仁恩の有がたきを感じ身を粉に砕きてゝろをせめて勤勞せしかバいよ〳〵殿のほまゝろに叶ひかねてい大祿をもあたへたまふべきあらしかども次第〳〵に引あげらるべきぞんじよりまて先側勤並に命じられ友右衛門義年來江戸表に住居せしかば万事に馴れたるものあれバとて勘定奉行に申付られたり一休職直にして厘毛の相違もなく殊に賄方にて諸方へ携物等と調へけるに疑迄買あげのしあよりい扱群ものもよろしく入用も減少しけれバこれひとへに友右衛門がとたらきありとて賞

勇をしける和殿わも悦賞まし〳〵て褒美として百五拾石加増をたまとり都合三百石となりしかゞ友右衛門ます〳〵忠勤の勞をつくしけるがわが身今かくの如くになれども たゞ數馬が身の上をあんじ何卒は勘氣を赦免もるやうにいたし遣としたくと内々願申けれゞ細川どの申されけるゝ數馬事ゝ寒公の身分にてゝ劍術と學ぶいとまなるまじうかく〳〵と月日を送る中いかある變事出來すまじきものにもあらず是に因て稽古修行させんため勘氣を申わたし友右衛門へ預おきぬるところあり大望ある身のうへにて生どりしてゝ其本意とげがたかるべしと思ふを以てわざとかくのごとくにゞ付たるあれゞ此むねよく〳〵ゞ明すべしと執奏人へは沙汰ありけるゝよどやがて友右衛門へ斯と君の仰内存を達せしかゞ大川あまりのありがたさゆ唯かんるゐ數刻におよび數馬にも殿の仰内存とゞ聞せば勘氣ゝ君のは仁心にして態とは免んなき事ありこれあんぢが大望を成就あさしめんとの厚きおぼしめしの所ありかゝる廣大のはめぐみ何を以て報じ奉らんやと貳人ながら手をとつてうれしなきに泣けるぞ道理なる友右衛門かさねて數馬に

ひかひゞけるゝ汝をそれがしへはあづけ下されしも劍術兵法をよろしく教導せよどの仰悲あれゞ心をせめて出精するこそすあはち殿への御恩報じの一ッなるぞとさとしけれゞ數馬も君の御情また此うへのあるべしかと骨髓に徹しておぼへしほどに晝夜勉食をもわすれ劍術兵法をまなびゝるに友右衛門も生用の甚ひまにいゆだんなく教導あしけるよりより友右衛門劍術兵法おおいてゝ無双の達人ありそのうへわが身のあとあしてをしへ數馬もまた一心を盡てあらひしゆへ尋常の稽古と違ゆ一年もかゝるべきをわづかに四ヶ月ばかりの中にめつきりと上達しける是によつて友右衛門いよ〳〵勇氣をはげまし教導くに本望を達せんとする外あ心をうつさづして習ふ所あれゞ數馬が手練聊も友右衛門におとらぬほどになりしかゞ大川もはゐた悦びもはや斯のごとくにてゝ大躰の強敵に逢ふとも討そんずる事ある可らずいで此上ゝ敵の行衛たづね出し右の實否をたゞし仇を報ずるまでありとひとつゝ堅堵せしかとも其敵何方をあてなにを證據にたづねべきやうもあしまとに友右衛門ゝ生用多く外出なりがたき役がら

の事なれば江戸の中に隨分こゝろがけたづねけれども五里七里とふみ出してさがす事いかあはざりし數馬もゝはや今年十八才の若ものあれともひとり旅もさせがたくさしあさり此事に當惑して兎角に佛神の加護を願ひ祈るより詮方あるまじとかのまへにも利益を蒙りしうへに只淺草觀世音のほめぐみを願ひ奉るの外にわらにとひたすら信心をこらして友右衛門に役目の暇をかんがへて淺草へあゆみを運びけりまた數馬に部屋ずみどうせんの身のうへあれば心の儘お日柳して本意をとげさせたまへと他事あく願願したりけりかれてれせし中に光陰矢の如くあて其年もくれて數馬十九才にあり多るまかるにいまだ敵の行衛いさゝかの手がゝりもとめ得ざりしかば數馬つら〳〵思案をめぐらし所詮かゝのごとくに當地に安居してさがしもとめん事覺束あければ一人あり國々所々を經めぐりて尋ねんものと友右衛門に此由を相談しければ友右衛門もつとも至極におもへども生死とかりがたき旅立るれば引わかれん事も忍びがたし殊更數馬とても敵の面体も見しらぬ事もあきにより實否をたづねがたき敵なれ

ば若强あるものと獨手ばあして出さんもいかゝなりと跡先とあんじ何卒かりを見あわせ殿へ願ひまゐらくありともはいとまを申うけ一所に旅行すべき間夫まで相まつべしと宥めけるゆゑ數馬もちからあく其まゝにて數日を送りける時に友右衛門工夫をめぐらしせめて敵の面体格好にても聞まはしく思ひ横山いもと會津家の臣下ありしかばかの家中の諸士あたりよそながら尋ね聞べしとあるひつき所縁をもとめて保科の家士によしみを通じ老人などにおもに附合かれてれと入魂の中とありしかば而して余處ながらも横山圖書が事をたづねけるゆ其人すあちぞんじたる通りを委敷ものがたりしけるにゆ友右衛門耳をすましこゝろをかたむけてよく〳〵圖書が面体あにかを聞とり大ひによろこびさつ少し手がゝりを得たりとて數馬にとくとゆふく先てもとより圖書ゝ軍學劍術の達人なれば江戸をさつて外へ行べきものにあらず唯江戸中の諸大名の家中へひそかに手寄をもとめてさがし見んとて頻りゆ其手つゝきを工風あしけるとかやお菊兄に面會して委しく往事を訪く

○第拾回

扨も大川友右衛門い伊南數馬が恐中を推察して何卒敵の有處を知らん者と晝夜工夫をめぐらしその敵の面体格好なりとも聞ばやとおもひ保科の家中へとり入ハ横山圖書が人相骨柄を委しく聞、出せども最とや十餘年も過ぎ去りし昔しの事ゆゑ確とい知れざれどもつその人がらを聞得たれば捜去尋ぬるに便りと恐にいさみ諸大名に旗本の家中まで紛ふさがまたづねしあこれぞとおもふ便宜あくてまゝろあらずも居たりける是によつて友右衛門とわが身い君恩のかたゝけあるを報ずんための奉公あれバ咄もおこたる事なく私し無きやう大事にかけて出精する中にこの事とはからずんとおもふがゆゑゐ身沈とも身勞れけるにぞ斯の如にてい辛勞のみゐて自然奉公も相成るまゝければとて數馬が大望餘人よかたりて願ひべきやうもなくてゝろ一ッよてあんじ煩ひけるが此上い天道にまかせ神明佛陀の感應ゐあづからずんバ知る事もあるまじとおもひその身い勿論數馬よも申聞せあけくれ佛神の加護をいのりける數馬い母の遺言なれバ一心不乱に淺草觀世音へ參詣しいまゝある身分ゆゑあるときバ本堂へこもりて通夜あしまたい終日めぐりて百拜し奉り是をせめての便りとして月日をおくりし處ゐあるを日數馬今宵も通夜して祈り奉らんとおもひ夕方より淺草へ詣ふで本堂にこもりまもるがら觀音のゆ名を稱へありけるが夜半過ぎにいたりてゝきりゐ眠氣さそにだわれゐがら不信心なりとこゝろをとりゐやし眠るまじとおもへどもおもてずしばらく睡眠みしが何方よりともなく一人の貴僧數馬が通夜せし傍らゐ來りてのたまとく汝いかあればかくこゝろをくるしめ祈りけるやと尋ねたまひしかバ數馬うけたまとりさんい某がしの大願人力の及ばざるによつて大慈大悲のゆ惠をよてその大望を達ゑたく勿躰あくもゆ佛にゆ苦勞をかゝ奉り候なりとこたへゑかばかの僧のいとくあんじすでに望みを遂すべき綱にとりつひて居りあがらまた別よなに事ゐか新るぞや無益のこゝろを勞さんより信心と違へず時節をまつべしかあらず三日の中にい能き便りを得ることゆるべきぞとのたまひけるゆへろれといかある便宜にて候やとたづねんとおもひしうち忽然としてゆ像い見へたまとざりしゆ其ゆ裙に縋りてなはも承まとらんと思ふうちたちま

ち目覺て見ればたゝ一すゐの夢ありけりされ共まさしく貴僧の實ひし事ども耳もとゐ殘ればこれもまた觀世音のお告げありとわりがたくこゝろ勇みて夜の明るを遲しといそぎかへりけるに友右衛門ハ駿馬が信心怠りあく通夜せし事をよろこび翌朝ハはやくふき出でもはやおしつけ歸るべしと待居たりしにはどあく駿馬かへりけりその顔色常よりもさもこゝろうれしき面体なりしかバ友右衛門も何とあくこゝろうれしく機嫌を尋ねけるゐ駿馬すなとち夢の事つぶさにものがたりけるにぞ友右衛門大に感歎しそれそ觀世音菩薩のおつげにうたがひなしお身の信心納受ありて賜し給ふものならん三日の中ゐたよりわらんとゞまことゐわりがたたおつげありと此頃ゐあき悦びの思ひにていかゐる便宜のゐることやらんと朝より夕べにいたるまで今やゝとまちけれどもこれぞと云ふ事もあく徒らに二日をすごしゝ事あれバ明日たゝ一日といよゝく信心をこらしてぞまちたりけるこゝろ友右衛門が妹におきくといふものありさるお旗本ゐ奉公してありけるが外に親類とてもなく只友右衛門計りを便よりにゐもひ居りまた友

右衛門とても實の妹の事なればをりふし音信を通ぜてたがひに無事をつげ去らせけるよ四年以前友右衛門事秋元家を退去し細川家に奉公せし砌り知らせたくおもひしかども其頃い中間奉公のときなるゆゑ此やうすを去らせていい妹のためにあるまじとて態と音信も通せざり去がそれよりしていい細川どのゝ厚恩數馬が大望の事のみおもふて一向妹の事も忘ちわすれそのまゝにて年月を過しけるにこの妹いろのは旗本方に奉公して隨分首尾よくつとめけり去かるよ年頃よりもありし事ゆゑ媒人ありてさる屋敷の家中へ縁談をむすばんと申けるに依てお菊この事を兄友右衛門へ相談せんとわざ〳〵秋元の屋しきへ使をもつて申遣しける處に其頃もはや友右衛門い細川家へ中間奉公にすみ込み補助と呼れて勤めし時ぶんあれば秋元家にい居らざりけりもつともいづくへ行しやら其先もしれざるとの事ありしかばお菊はあとだあん去かれこれとたづねもらひしかどもゆくさき知れざるによつて是非もなく媒人の申お任せ自分のこゝろ一ッよて縁付きたりしが夫婦の間も睦去くゝらしけるにこのせつかのお菊惡病をわづらひ仏まとと

りありがたくによつて夫の手まへ暇をとりかの媒人のかたへ歸り養生すれども業病ゑ

ゑ本服の期をへざりけり媒人大ひに迷惑し親類のかたへおくらんとおもへども兄友右衛門の外に親去きものあきよしあれば何卒友右衛門をたづね出し引わたし申さんと專ら大川の行衛を尋ねもとめしゑ細川の屋敷に同名の人あると聞、去よりさつそくゑきてたづねければ四年以前當家に奉公し段々立身し今い勘定奉行と勤めれきゝありとの事なればかの媒人大ひに悦こび友右衛門に相逢あくおもひすあとちお菊に其よしを申きかせ直筆のみと去さゝめさせそれをもつて細川の屋しきへいたり友右衛門かたへ行き始終のもの語りをあしみといたせしかば友右衛門ひらき見るに業病の樣子ゑきしさゝめかくまひ下されとの事ありしかば友右衛門間柄のことなればさつろく引うけ申べきよし答へ媒人へも彼是の禮謝あつく申のべこれより迎ひのものさしつかとし申べく候間夫までのとゝろよろしく頼みいるだんを申聞媒人をかへしやり友右衛門いろゝに考引とりたりとても屋しきへい呼びいれがたしとて俄に本石町一丁目に裏だあ

をかりていろぎ下女一人をかゝへ駕籠をもたせてむかへゝ遣としかのおきくを引とり病氣養生をゞさせされども友右衛門と數馬の兩人ハ淺草觀世音のほつけにて三日の中にハ便宜わらんとのほゝゑらせもゑこゝろよろこび待居げれどもさしたる便りのすゑもなくたゝ茫然として居たりし處に三日目にいたりて四年以來音信不通ありし友右衛門が妹業病をわづらひしに因て介抱の義を申來たりしかゞ兄弟のよしみゝすてがたく引きとりゆるが其間彼是六日もかゝりしほどに三日の間だ待わびし甲斐あく心づかいの中へまたハ妹の世話をヤ來りしゆゑ友右衛門はじめハ少しもこゝろづかずして借宅をかまへ呼びむかへけるがつらく思案せしにまさしく數馬が盥夢に三日の中に便宜のあらんとの示しなりしかゞその瑞驗なくていかなとぬ事なりゑかるよ別の事もあく只妹の難病ゆてわが辛苦の中へかへりしのみなりさゞしこれについてその便りを得る事もあらんが殊ゆ三日目にいたりて四年以來おとづれもせず生死のゆゑもしらざりし妹が不思義よ尋ね來たる事不審なりまづ渠が身のうへ四年以來の始終をと尋ね聞くべしと不斗こゝろづきしかゞ即時に妹かたへ行ゆヤしけるハ故をこゝに引きとるといへともわれ主用に暇なくしていまだ委しき物語りも聞ざりしが某しこともかやう〳〵のわけにて四年以前秋元家をたちさり細川家へ中間奉公せしゆゑゑらせたくおもひしかゞも汝が卒公のさまたげにもならんかと態と便もせざりしが聊か仔細ありて心をつかふ事おはく片時も安居せし事あきによつて自づから陳述におよべりまづあんぢ嫁せし夫れいづれのゆゑ家中にてあにと呼るゝ人ありしゆゑやまたなにゆゑいとまをとりけるやとたづねけれゞお菊申やう妾が緣づきいたせしも四年以前にして相聽家あれゞ緣づきていいかゞゆゑ媒の申さるゝについて其許さまへゆ相談いたさんとゆんじ秋元樣へ入と遣ハせしに是よりさき河處へかゆ立退の後にてゆ行衛しれざりしゆゑあんじ歎きて候ひしが媒のすゝめと申ゆ主人よりもゆゆるしありしによりて則えんづけいたし候ひしが妾の夫とまをすハ立花和泉守樣の御家中よて伊南隨習と申し百五拾石の身のうへ軍學武藝堪能のよし不束あるわらとを聰悟にもてあしくれられい故よろこび居中所

に今年春の頃よりこの病氣をわづらひ申候ゆゑせひあくいとまを賃ひ媒の人の介抱にわづかり發生いたし候得どもそのしるしも候ずず身い何方よゐ在しますやと便り無き身を打あげき晝夜哀しみに堪へず候ひしに此頃久しぶりにてそもとさまのに行衛しれたりとて媒の人身が方へ尋ねまゐられ扨こそ斯のごとくに世話にあづかり候とて一部始終の物語りせしかば友右衛門これをきひて夫の姓名伊南圖書と い數馬が苗字とおなじことありもつとも同氏同苗のもの世間におほくありといへども伊南の苗字いまれなるべし殊に名を圖書と号し軍學武藝よ達せしと い何とやらん心がゝりのやうにおもひうさねて尋係けるい其夫なりし圖書といひし人い立花家の譜代にてありしや又人相骨柄年齢いいくつ位ひありしぞと尋ねければお菊が申やうさして譜代と申にても侍坐おくよしゐ候得共一家中に門弟多く家中のおもとくわしからずかの侍家に十年あまりの勤仕のよし年い四十九才にてせいたかく色黒ろく人品骨柄かやうくと物語りしに友右衛門以前に會津の家中にて聞たる格好ゐ符合して年のほども會津を出たる時い三十四五歳ものことあればいま四十九歳とあればもし横山よていあきかと考きりゐ勘ふこたへしかば猶さりげなくして其圖書といへる人い立花殿へ奉公せざる以前いづかたにありし人なりしや生國いいづくといふ事をきかさりしかと尋ねければお菊がいとく委敷事いうけたまとり申さず候得ども生國い九州のよし立花樣へゐりつかざるいせんも侍大家よ奉公いたされしよしものに家いいづれといふ事い承り申さずとこたへけるにぞ友右衛門いをゐことごとく此方のおもふとはりなるゆゑ必定たづねる歟にして觀世音の夢の侍つげひおしかるまじかくのごとく符合の事とれゝつるりすゐと三日の中に便宜を得べしとのお考えしに感せりと心中甚だよろこびまづ妹にい何事もゝのがたらず其まゝ發生ゆたんおくすべしとて數乞してたちかへりけり扨數馬に右の樣子をかたりきかせて伊南圖書といふ事いさゝかこゝろへずといへども其外の事ともまづことごとく此方の尋ぬる歟ゐ似たりさるよよつてろれがし立花家へ立入りとくと其ものゝやうすを見聞すべしと申しければ數馬大よろこびいさみ伊南の苗子い稱

にして亡父の一家親類にも伊南と名乗ものゐ侍坐あくおにゝもせよ応當りの事どもに候得ゞ片時もはやく賢否を侍たゝし下さるべしと申ま依り友右衛門ゐおもふやう所詮われ直にそのものゝ對面するともさすがであらかある證據も得られまじけれゞ別に智謀をめぐらして吟味せんとゝやかく工夫しけるが忽ちに一ッの手段とあんじいだしてさへかた横山が人相をきゝたる保科の家中中西三郎兵衛とたのみ立花家に仕へゐる伊南圖書と余處ながら見てもらひゝろかゐ其賢否をさぐらんにゐ之かじとおもひしかゞ先立花のやしきまいたり圖書とひき出す事こそ肝要あれとて種〻に心を苦しめ肝腦を砕きしがさひ　ひ立花和泉守どのゝ家中ゐ中村軍兵衛といふものありて友右衛門と些のよしみありけるゆゑ此人をもつて謀らんものをとおもひやがてかの軍兵衛方へおもむき對面して申げるゐ侍家中に伊南圖書と申侍方ゐ軍法堪能ゐおわするよしかねてうけたまとりおよびたるゑ付ていは承知の通り某し若年より軍學武藝の執心ふかけれゞあにとぞ圖書どのに面會あしろの興義と聽聞仕りたく存ずれゞ貴所の侍周旋をもつ

て侍ひ合せたまとり候へと他事あくたのみけるに彼中村聞てこゝろ能く承諾ろれいなにゝゐいと易きゐ事なり伊南氏へ申しきかせ近日侍ひき合せ申すべしと挨拶しけるにぞ友右衛門大によろこびそれゐ千萬のたじけあくぞんずるなりかならづ〳〵侍たのみ申したうとて厚く申述べてかへり件んのおもむき數馬よも物語り先これまでゐ上首尾なれゞ此上ゐ中村の返答と俟て多年の本懷を晴さんものをと互ひに示し合ひ其信を覺ひけり

○第拾一回　苦計僅かに成て數馬驚を見認る

去程に大川友右衛門ゐ敵横山圖書が實否を糺さんものと立花和泉守殿家中中村軍兵衛へよしみあるゆゑ此軍兵衛と語らひ伊南圖書ゐ對面のことをたのみしかゞ軍兵衛心よく承知してさつそく圖書に右のおもむきをものがたり對面あしたまとるべしと申にぞ圖書ゐ人に懇望せらるゝ事身にとつて面目をほどこす事あれゞ早速承知してゐんどきおりとも對面ゆすべしと返答しけるゐぞ軍兵衛悦びそのむね友右衛門かたへ通達しり

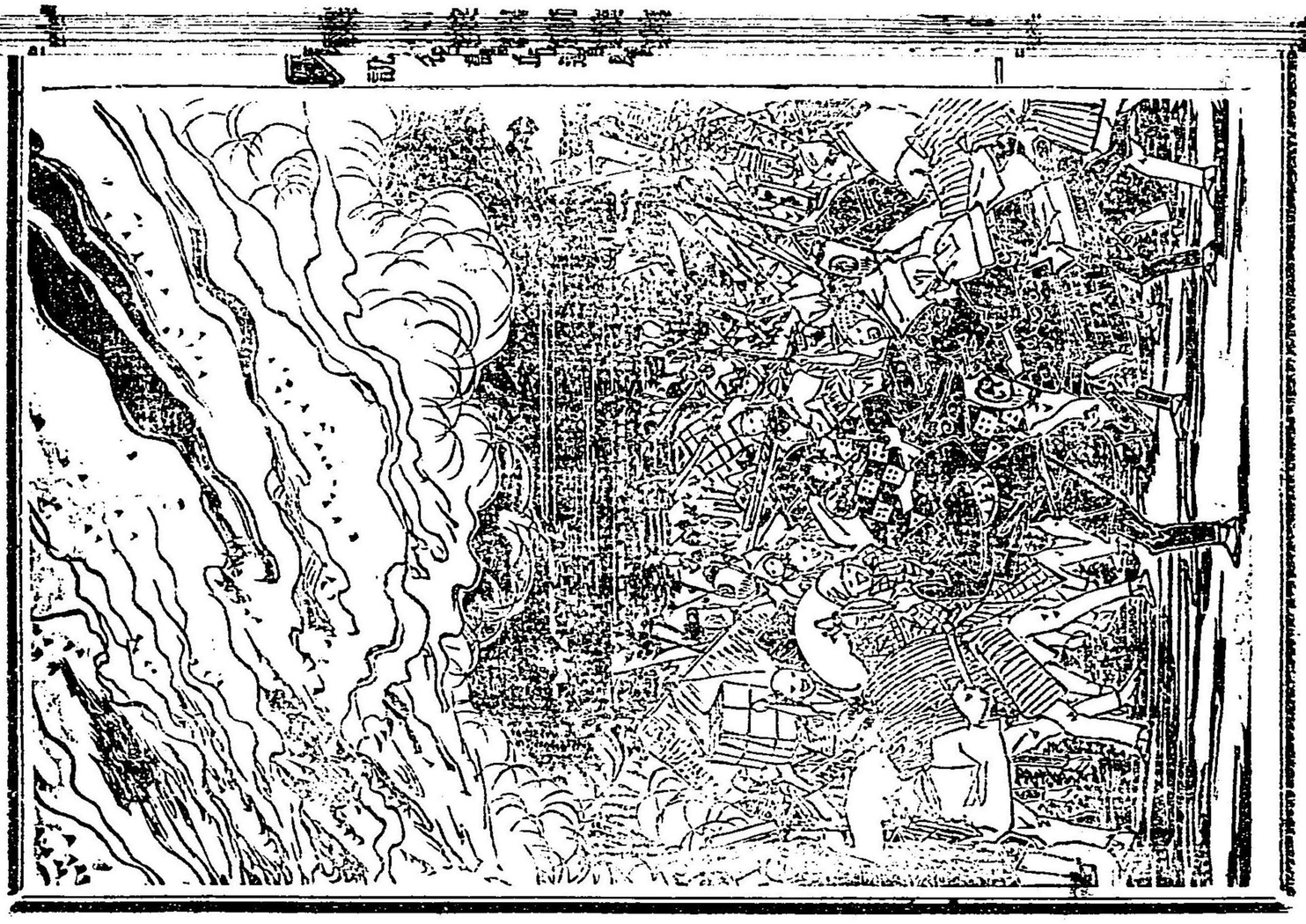
り友右衛門悦氣かぎりあく翌日中村が方へいたり今日苦しからずバ引合せ下さるべしとヤすゝより軍兵衛ヤすやう然られたいまゝ同道ヤすべしとて友右衛門を伴ひ圖書が宅へおもむき玄かゝのよし案内せしかバ圖書いでむかひ興の間ゑ請じ一ト通りの挨拶たがひにすをけれバ友右衛門ヤやうそれがし兼てそこもとさまの御大名をうけたまはりあゝとゞ謁見とねがひたしといへども主用寸暇なく殊にまたおぼしめしおもはゆたん〳〵延引まかりすぎヤ候しがこのごろ頻に玄たゞしくぞんじゆゑ中村どのを相さのみ御對面を相ねがひヤ候ところさつそくは承知なし下さるゝ條よろこび入て候あり以後ハ別心なく御入魂にヤうゆたまはりたくと述べけれバ圖書ヤやうこれいく〳〵痛みいりたる仰を承りハものかな無能の某を御聞およびあつてこれまでは入來たまはりしこそ靦着此上もなれなく仰せまでも候ハず此以後ハたがひに懇志を通じヤべくなりと返答しけれバ友右衛門ヤすやうまづもりて御芳志かたじけなくぞんじ候あり扨はじめて拜顔を遂げ無禮のヤ條に候得ども某御たのゑヤたきい余の義にあらず軍法兵術は師範の由承りおよびハにつゆあにとゞ某も聽聞仕りたくこれに依つて先今日對面の義を相ねがひヤて候しあり自由あがら君に仕へる身分ハこゝろのまゝに他出もありがたく候得バ近頃は苦勞の御儀なれども近日これある中村氏御同道にてそれがしが拙へ罷きたる市中の別宿へは入來下さらバ入魂をむすぶ玄るしに一献を進めまゐらせたく存るあり其うへにて兵書は講釋うけゑまゝりたくぞんじ奉れバ此義は承知にゐひてハ外聞かゝ〳〵大慶此上あく候と懇懃にのべけるにゞ圖書ゑしやくして今日はじめて對面ととげハ處にすぐさまいたは懇志の招きに預る事身ゐ取つて大慶なれどもなにのゆゑもなくしては饗應にあづからんも氣の毒なりもとより不才短智のそれがしなれバ明悟らめ申せし事もこれあく候得どもは入魂の中とありてハ疎意を存せず覺悟せし事ハは噺し申すべし別よそれのみには招きの饒舌みいつて候と辭讓して申けるにゞ友右衛門ゐ玄かへして是ハ〳〵は叮嚀のは挨拶ありたい入魂の情をつくさん計りに集會仕らんと存するのみなれバはこゝろやすくは鬱散かた〳〵は入

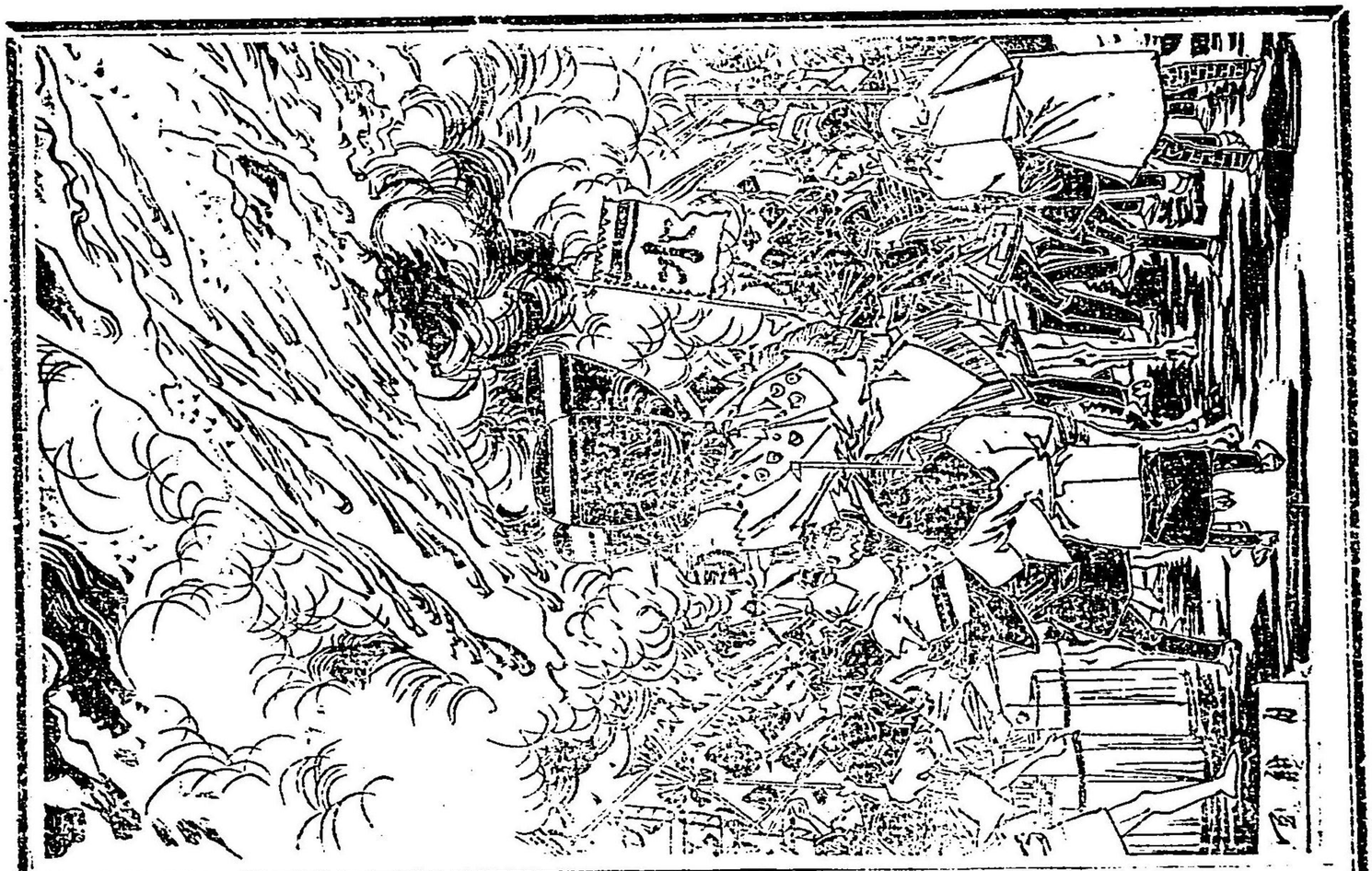
來たまとるべし一旦よしみをむすび候ていたがひの隔てなきこそ信友とぞんじ候なれかあらず〳〵は辭退は無用下さるべしと申すゑぞ中村も側よりいろさま友右衛門どの平生諂らひあき蕞直の人ある事それがしもよくぞんじはべなりまねゐるゝも信實のこゝろより出たる事なれば辭退いかへつて失禮にも似たるべし圖書どのは越あるにおひてい某もは供いたさんと申けるにぞ圖書も此上とあふひに隨ひ參向いたすべしと申ゐより友右衛門いよろあひ約をかため暇申てゝへりけりさて大川い夫より直ぐに保科の家中々西三郎兵衛方へおもむき對面してやけるとさて其許樣へをり入ておたのみ申たき一義これありは承細くださらば拙者大慶此うへあしと申ければ三郎兵衛これを聞て何事かとぞんせねども我身にかあふ事あらばうけたまはり申べしは遠慮あく仰聞られよと返答しけるゆゑ友右衛門がいはく別の義にとしはすいつぞや其許樣へは尋ね申せし横山圖書どの事某いさゝか尋ねたる事これあり候ゆゑ多分江戸中におはすらんと存じ所々を聞あはせ申候處あのごろさるかたにて似寄の人に對面いたし候

得ども某もとより圖書どのゝ面体を見知り申さず數日費所のはものがたりありし人相に替ることいあけれども其名を伊南圖書とやしいが不審しく某おもふにもしや横山どのあらんかとぞんずる處ありさりとておしりけたる義も申いたされず是に依て何分貴所のは眼力とかり申たく存ずるありねがはくい彼の人をは覽ありて實否をたゝ云たまはらば千萬のたじけあき仕合ありと申げる中西聞てろれい忘易き事あがらもし横山に相違なき時い君侯へ對し拙者對面のことといかゝなりと難じるを友右衛門然れば其義いろれがゑよろしくはからひ置きたり彼の人をさる別宅へまゝ孫き寄せ候えば其節其許樣いは出下されふすまの遷よりは覽下されあば實否相知れ申べし近頃は苦勞ながら此義偏あは賴み申ありと餘義あく申けるゑぞ三郎兵衛うちうあづき左樣のは取計に候上い何時なり共參るべしは出會の日どり極り候はゝは知らせあれと快く承知せしかば友右衛門甚々よろこび禮謝してたち歸り數馬にも右之趣ヤ聞かせ本右町三丁目にて貸座舗をかりおき日と定めて彼の圖書と中村軍兵衛をまねき酒宴をまふけさま〳〵とも

てあしげり數馬も實否をしらんためとて友右衛門伴ひ來り是い拙者が舍弟大川數馬と
ヤ候ぼ見知り下さるべしとて坐舗へ挨拶かた〳〵さし出しけり實い圖書が面体を見
ざらせんため友右衛門斯くい計らひしとなり數馬い心中ゑ此者よこ山に相違あさやい
かにと案じて其坐をたち又々ふすまの影よりもよく〳〵見つめたりける處へ兼てた
のみ置たる中西三郎兵衛入來せしかば友右衛門則ち中西を案内してひそかあふすまの
此方より見せしむるに三郎兵衛よく見て年こそ強く寄りたれ圖書ゑ違ひなしと申すに
ど友右衛門大によろこび天と拜し地を拜しまづ何事あく中西を別間に請じ饗應しける
うち今中西が物語りゑ横山なるよと云ふ事を數馬聞くやいなや此年月こゝろをくだき
し親の敵けがすまじと大事とわすれて無念にたえかね奥をめがけて踏み込んとせしを
友右衛門後ろ抱きゑ老つかとゝらへ今討てい鹿忽ものと呼いれ父の汚名を雪ぐ事あた
はず件の實否をたゞさずしてはやまりあば諸人の誹謗を亨くべし勿論大事の敵あるも
ゑ無念口をしきいもつともあれども十内殿を討ち殺せし趣意の分明ならざる中はたと

へ肩をあらぶるとも親の敵と名乗かけて討つ事あたはず依て老ばらくしのんでわれに
任せよ兄弟とありしこの友右衛門無念い同じことありせきこんで仕損じていい是迄のこ
ゝろづかひも無益となるべしとて制しとゞめ奥坐舗ゑ敵横山あり別間ゑい中西ありこ
れにも大望の事い穏便ゑせしことなれば双方へきこへざるやうゑ小聲にあり仕方を断な
し數馬をあためし大川が意中の切あさたとへんにものゑし數馬い血氣の若ものゆゑ前
後ゑも辨へずすゝみしかども友右衛門が利解を尽して制しけるにぞやう〳〵こゝろづ
き實にもと得心しけるが優曇華よりい逢がたき冤の敵眼前ゑありゑがら討つてとゞあた
はぬ淺ましさよと拳を握り歯を喰ひしばつて無念のなみだを流しけるゑぞ友右衛門も
數馬が心を察し腸をたゞがごとくゑもひしかどもかくてい果てじとゑはも數馬を制し
て先へ歸し夫より座敷へ出でゝ彼是と饗應し酒宴も終りたるにぞ主じ設けの淺からぬ
を深く謝し横山中村の兩人等しく立歸りければ中西もひそかに跡よりかへりけり友
右衛門い兩人とおくりかへし中西によく〳〵圖書が實否を聞さだめふたゝび計議をめ





ぐらしなる寇に謀略い一旦の利ありといへども不義不道よおこなへば必ずそのわざと
ひ己が身におよぶものにて彼の横山圖書い過ぎとし保科家よ勤仕の砌り買ひ求めし祐
定の刀の祟りしよやはらずも最愛の女房を手にかけ殺せしかば其まとし譯けたちが
たきよ依て平常い交誼を打わすれ伊南十内をさん時の謀策にて情けおくもわざむき殺
し密通のてゐにもてなし瀞せしが其事に付て會津を追放せられすでに十餘年の星霜を
過しぬれば今い一トひかしとあり會津にてのこともうち忘れいたりしに天命のがれざ
る謂れにや友右衛門が妹お菊一旦横山圖書に嫁しけれども悪病によつて離縁となり友
右衛門が引とりしより圖書が奮悪露顕のはしとなり友右衛門の智略よつて圖書を市
中へ偽引出し會津の家中中西三郎兵衛と頼み千辛萬苦の思ひをあしまづ横山圖書い手
に入たる如くにおもひけれども伊南十内が横死の實否明白あらざる中い名乗りかゝり
て討ちはたす事あたとざるおよつて暫らく其まゝにさし置たるをさしも智恵ふかき圖
書すてしもさとらねば斯くのごとくおのれを謀られるとい夢よもしらず大川が盤勉の

もてあしを悦びいよ〳〵入魂のよしみを通じるるこそ愚かあれ友右衛門い跡の手掛り
い知れたれどもいま一ツの事をたゞさぬうちい數馬が敵討の望みもたつしがたきゆゑ
いかゞしてこれをたゞさんと千〻に心とくだきけれども何と種として吟味すべき便り
もあかりしかば殆これよい當惑難澁におよびけるが觀世書のぼ告げより妹が書信あり
てもぎりしゆゑにこそ先敵のやうすい知れたるあれ然れば件の實否も兎角よ妹をかた
らひたづねたゞさば明白あらんとこゝろづき早速にも問ひたくおもへども注用よ暇な
くして二三日是非あく延引しけるにその年霜月のことあるが細川殿上やしきの裏手よ
り出火してとりふし西風烈しく吹火盛んとありけるにぞ細川殿さるものもどりあへた
まとずやしきと立退き給ふ近習小姓等つき隨ひ下屋敷へ赴きたまふべきなれども元來
心ばへ剛氣の大守あれば途中お馬と立られ家中の火消し役人其外家老用人の面々へ萬
事下知わつて去べらく其場と立ちさらずおわしけるがたちまち聽歎の躰にて南無三忘
れたる事ありと慌たゞしくゆされけるを近習の諸士等こい何事にて沙座しぞやと皆々

ヤけるに細川どのされバ余りの急火にて朱印の函をとりのこせり萬一燒失におよび
あばわが家の大事ありとヤされけるゐぞ諸士大に驚きこはそも大切の義ありと手に汗
と握り火もとの方を見るゑ浮上や敷いのこりおく火かゝりぬれバ如何ともすべきやう
あくたい茫然として見て居るばかりゐり（此浮朱印い細川家代々將軍家より浮改めの
上ハ朱印を据ゑさせたまひ家督の證とある無てかゐいぬ重寶なり）恐る大切の品萬一
紛失燒失等ありてい公議へのヤ譯たちがたき事ゐれバ浮先祖より浮代〳〵の大守大切
に取扱かいれ則辰己の角なる土藏ゐいわひおさめ置れけるゐ不意の大變によつて失念
ありける事まことに細川家の浮沈此時ゐりとぞ見へにけゐ然るゑ大川友右衛門此よし
を承り直に火もとへ馳せ申さよく〳〵樣子と見とゞけ駈來りて細川どのゝ馬前にか
しこまりヤけるい某唯今火元を檢分仕りい處浮住居むき浮長屋等までのこらず燒失
仕り火勢辰己の方をもつてたゝいま最中と相見へまとせり然ればこの間に東よりかけい
り浮朱印を守り出し奉らん憚りながら浮心易かるべしとぞヤし上しに大守よにも宮れ

しくぞんじられまことに故ならでい是を動むるものゐるべからず守り出さるゝ事ゐら
バはやく馳せ入り持ち來るべし戰場におひてい予が命にかわるよりこの浮朱印をとり
出さバ百倍まさりし大功なるべし万卒い得易く一將い得難しといへバあやうき處へ遣
はすべき故ゐらねどわれ滅亡せバ汝も共に亡ぶべし此ゆゐに制さずヤ付る所ゐり疾と
く〳〵とゐりしかバ友右衛門い大地にひれふしまことにゐりがたき仰を蒙るものかゐ
それがしまかり越しいにおひていたとへかしこにて一命を落しいともハ朱印いつゝが
あくさしゐげ奉らん事相違ゐるまじくいしかし凡四五町燒野と相成りい得者歩だちに
てい向ひがたくいハ馬を一疋拜借仰付られゐバ一さんに馳せ付きいハん西の方い風
上ゐれども道遠くして火勢りよく相見へヤゐり東のかたい火勢もうすく見へい得ばこ
れより向いんとぞんずるなり乘馬烟りゐむせざる樣に役人乘ゐ命せらせ此方より大團
扇ともたせて只管ゐふがせ下さるべしとヤすにより實にもつともゐりとて直樣手勢の
火消し役人へそのむねヤ渡されしのバかしこまりて大勢風下ゐおもむき立ちあらんで

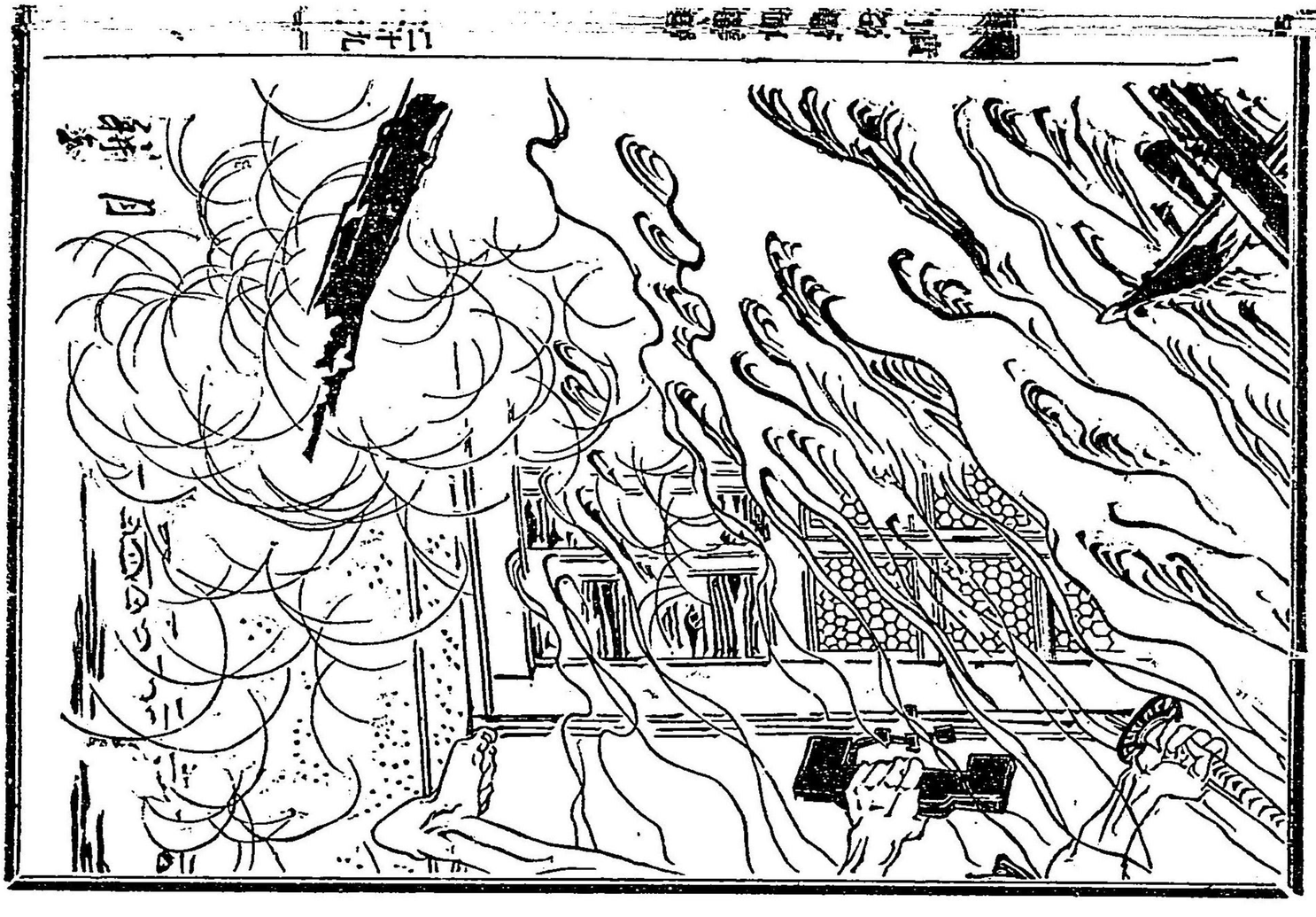
ぞあふぎける

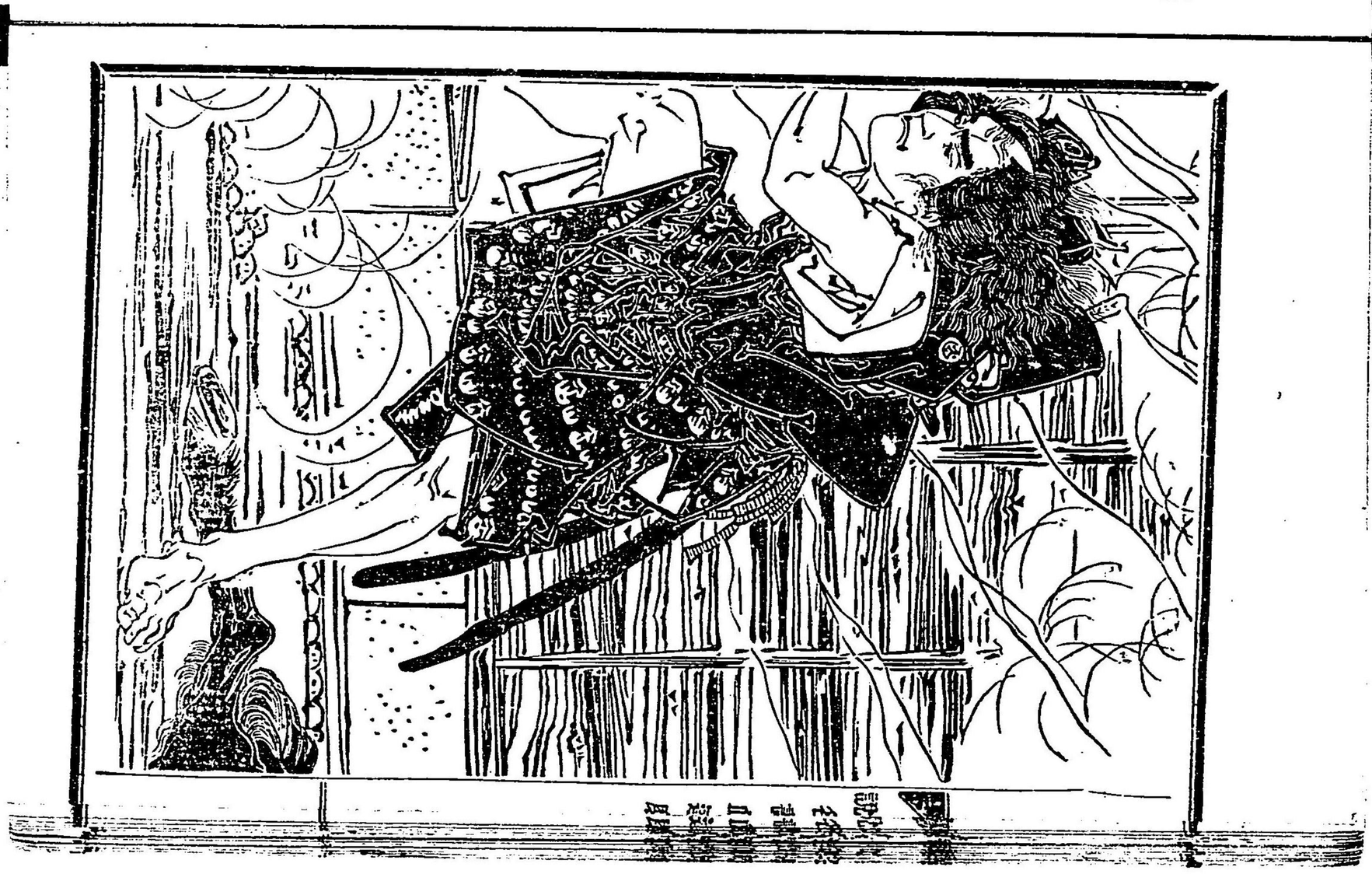
○第拾貳回　友右衛門身を殺して忠義を全ふす

賢者はよく人を愛して思はず其恩を報せしむる事ありまれを謀ふ情は人の爲ならずといへり左れば細川越中守殿先年友右衛門が不義の罪を免しかへつて家來とおし恩祿をあたへ置れし事仁君の情おして大川が忠功あらん事を明察ありての事ありしお果して今度出火の大變の節彷朱印をもち出さずおりしかば家の大事このときと案じ煩ひ給ひるところゑ彼の友右衛門先年の仁情此年月の厚恩をおもへば粉骨碎身するとも報じ奉るお足らずと欲しながら駄馬が敵うちの事を心腑おあやまし首尾よく本望をとげさせるまでは大切のわが命なればとて隨分つゝしみ居りしとあり然るおこのたび主君の難義は家の一大事を見おながら私のことお一命をかばひ此要用を勤めずんば不義無道の賊なるべしとおもひしゆゑ抽ん出て彷朱印をとり出し奉らん事を受合けるおぞ細川どのは悦喜あり火消役人にゆ付られ火勢を防がせらるゝ其暇に友右衛門は羽織とひきゝりて馬の四足を包み其身はむしろを水よひたして腰おまき皮羽をりを着し身がるお拵且ちやたてを取出しさらくとはしり書に遺書を認たゝめこれを手おもちながら殿の彷前にひれふし兩眼おなみだをうかめものをも云わずおりしかば細川殿其心中とさつし給ひあゑ事を云わんと欲するぞやこの期に臨んでつゝむ事なかれ心中に思ふ事あらばはやくゆせとありければ友右衛門ぱつと頭をあげ唯今彼所におもむきして彷朱印は出し奉るべくはへども某が一命はふたゝび生ん事覺束おくはへばこれ今生の彷わかれにてはあり尤無事にもちかへりさしあげ奉らんづれどもおまじひお一命を助からんとせばかへつて彷大切の品ひおしく燒失仕るべく哉と存し奉るによつてもし某が彼所にて相果てはいゝ死體をよくくあらた先下さるべし聊忠義の一念彷朱印と守護おし恙なく彷手に入らせはとんさておそれ多きねがひにはへども某し相果はいゝ駄馬が身のうへ偏へおに憐憫をさしくわへられ下さらば生々世々の彷恩ありがたくぞんじ奉るべしと一句の中に無量のおもひとふくんで願ひければ細川どのこれを聞給ひ

双眼に涙だをうりめられ汝こゝろ安くおもふべし數馬が事承知せり不便をくわへめしつかふべきぞ去のしなんぢかおらず一命を輕んずる事なかれ無事の再會相まつあれば片時もはやくかしこに馳せゆき時をうつさず立かへれとこゝろもせきて見へさせ給へば友右衛門仲の遣書を近習にわたし數馬へとゝけたまいをと云すてあがら立あがり大守を三度礼拜してわが身い勿論大守より拜借なしたる馬ゐも氷とそゝぎかけ発い方〳〵とひらりとうちのり一鞭加へ跡ふりかへりてにつことわらひ其儘火事場へ駈け出せしい漢の紀信が高祖に代り車ゐ駕して燒死したる忠義に劣ぬ忠臣ありと諸士一同ゑ嘆稱せり細川殿も泪をぢかめられ天晴の武士ありと悦び有しも道理なりけり斯くて友右衛門い東の方より火の元にいたり向ふを屹度見てあれば〳〵や土藏にも火うつりて次第〳〵ゑ燒ひろがるにぞ心中ゐ天地神明を祈念し奉りそれがしが忠節むあしからず何卒汚朱印恙なくわたらせ給へとふし拜み鞭をくわへてむたいゑも火氣とおかしてゑせたりしにあんあく土藏のきわに至りしが馬いたちまち烟りの爲発に四足を縮め

樓とばかりゐ斃れしと友右衛門い駭あらんとかねて期したる事あればひらりと飛下り煙と凌ぎ火氣といとひまつしくらに扉の前にいたりて見れば錠前おりて開くべき樣無程にいかにせわしきおりありとて鍵を忘れしおろかさよと大ひゐおぢろき悔ひたりしがうくまでこゝろをつくせしものがやみ〳〵爰に死せんこと後代までの名の恥辱且い御家ゑ二ッとなき貴重の汚朱印を猛火のために灰燼とおさんこそいかゑも以て口惜けれと天を仰ぎておげきけるが息の通ふほどいとたらかんと帶せし刀を引ぬきわが武道のたしなみも是までありたち刀も何かせんこれにて錠前こじあけんと立たる所にはや土藏の屋根に火氣うりりけるゆゑ内へ火氣の入ざるうちにとこゝろせくまゝ件の扳身を錠前の間へさし込力にまかせてこじけるにさしも丈夫の鉄ものあれと一念凝つたる友右衛門が忠義の勇力ゑてたちまち錠前われとんだるはづみゐ刀もおれたりけり友右衛門これを見て悦びいさみ戸まへに手をかけ明けるひやうしゐ土藏の家根ぐいら〳〵と燒落たり必死の大川もその音に驚きけむりとかのふゑひせびて絶入るやうにおもひ





しかどもこゝよと自分よ氣ととり直しかた先を喰やぶり血を吸ふて息をつぎ我命いまこそ限りあれとくゝんねんし肚裏をとげまし庫中に入りさしどへの拔身にてやけ落たる瓦をはねのけ〳〵に朱印のあり所を見るに二重箱に入れてありしがはや上の箱にい火うつりていまよも灰燼とあらんありさまあれバやう〳〵よしてとり出し上箱をバ取すて中なる函のみを持て土藏の外へ躍りいで天を拜し地を拜し嬉しやほ朱印つゝがあかりしと悦ぶはづそに勇氣もたゆみおもてずかつばと倒れるが又おきなほりてわが本望かく達せし上い死すともいさゝか惜しのらずほ朱印こそ大切あれ要ころあれと双肌ぬぎ火の氣ゐ遠き傍らなる地を堀うがちて差ぞへよて腹かき切りほ朱印の箱と腹中へねじ込み堀たるところへうつ伏しよ倒れてこそい死しさりける眞ゐ奇代の忠死なり此時細川どのにい友右衛門が安否いかゝと案事られしかども途中の義あれバ先中屋敷へおゝひきたまひて吉左右をほ待ち玄かるべしと諸士等諫めしによりやがて中やしきよ至りて玄關に立て俟給ふに友右衛門かへり來らずかれ是せしうちに出火もやうやく

おさまりしときこへし程に人をもつて見せしむるゐほ寶藏すでに燒失のよし聞へしかゞ越中守殿長歎あし給ひ扨い友右衛門の功にも及バざりしかさるにても友右衛門が身のうへいかゝありし疾く尋ねよとありげるゆゑ役人ども火事場にいたり件の土藏近邊をかきわけ〳〵さがせしに石段の前に一人の死骸あり背中い燒そんせしかども地花堀て臥したるゆゑ形いそのまゝなりしかゞ引起しみるにこれ友右衛門あり役人等もをあ〳〵あみだながら死骸を戸板にのせあたりをよく〳〵さがし見ておれたる刀とさしどへあらびよ錠前のさけとびてありしも死骸の下にありしかゞ其品々をもとりもちてはせのへり去か〳〵のよしをゆけれゞ越中守どの友右衛門が死骸を見たまひ泪をあがして中されけるいかばかり忠義の武士を失ひぬる事ゆがなやまりありし若しやほ朱印もちかへることもあらんかとこゝろづよくも遂とせしに渠が力にもおよバざりしか燒死なんよりいと腹切て死したるものならんと落涙數刻におよばれ彼の刀のおれたるど錠前の損じたるを役人共よりさし出しけれゞ細川どのつく〳〵と見たまひ錠前のうく

損じはなれ且刀のとれたるを以て察するに我鍵を集にあたもる事を失念せり此故お刀をもつてこぢはあしたるあらん丈夫の鉄物かくのごとくこぢとおせし事ゆゑ刀のをれしもことはりあり斯錠前をこぢはなすほどおれゞいまだ土蔵のやけおちざる以前お庫中に入たるありさて又腹さけて死する身の地をうがちて伏したるもこゝろえず友右衛門出行しをぎり某相はてあゞ死骸あらため見よと遺言あり其ときゝ只浮朱印の事にのみ心を苦しめ渠が詞に氣も付かざりしがいまおもひあたる事こそあれ死骸の疵口をあらため見よと下知ありけるもゑ役人どもかしこまりて友右衛門が死骸をうちかへし疵口をあらためけるゑ腹中より何やらん血に染みたるもの出懸りて見へしかゞ役人どもひきいたしみるゑ小さ箱ありやがて水とかけ洗ひきよめてさし出しけれゞ大守是を見給ふにゝ朱印箱ゑて封のまゝ少しもゆるんせずしてありけるにさてゝと封印を押しひらき見給ふにゝ代々連綿たるゝ朱印つゝがあくありしほどに細川どの思くずもおし戴きく忽ちゝ坐席をすべらせたまひて友右衛門が死骸にむかひ三度目礼したまひあまりの嬉しさにゑばらくものを宣わさずろゝろ涙にむせび給ひしがやゝあつて諸士等を召寄て申されけるゝ汝等いづれも心と止めて是と見よ友右衛門ゝ火中ゑ焼死すといへどもゝ朱印を大切にこゝろへし忠義ひあしからずその身の腹中へおさめ地をうがちうつぶせになつて死したる事はじ先より斯斗えんどの所存にて死骸を改め見よといひしあらんいにしへより主の爲に命をおとせし忠臣頗ぶる多く其名を竹帛ゑ止むる者ありといへども大川がごとき忠勇義心の武士あることをいまだ聞ず古今未曾有の忠臣我家の氏神ともわはぐべき武士ありもし友右衛門が忠死にあらずんゞゝゝ朱印むなしく焼失して上への申わけたちがたくいかなる災ひあらんも知れがたし然るに斯のごとく得難き朱印のつゝがなく我手に入たる事何を以て渠が忠義の大功に報ずべきんや細川家再興の忠臣と云つべしと感賞歎息ありけるゑぞありおふ諸士等友右衛門が忠死のありさまを感じ君の仰せ至極なるを承り左右申べきこと葉もあくみあくかんるゐにむせびけるこそ道理あれ細川どのせめてゝ友右衛門が最期のねがひとかなへて功賞とあす

べしとて即時に數馬をよびいだされ友右衛門が忠死の次第具に申渡され今日より汝大川の苗字と相續して友右衛門が名譽を發世よ傳へよとありしかば數馬い夢の心地して主君の仰のありがたきを思ふにもあは友右衛門に死わかれたるとかおしみ杖柱とも頼みおもひし甲斐もあく忠義ゆゑといいひながら計からざる最期を遂られ對面もせずわかれたるところ殘念なれと死骸を見やり五臓六腑もくだくるごとく悲歎骨髓に徹しおが主君の御前とはいかり歎きをかくして請せしあぞ細川どのにもさこそと推量あけて友右衛門が死骸をあつく葬り遣はさんとてはまたの僧衆におふせてねんごろに吊ひありしとありさて友右衛門の恩賞なりとて數馬へ新規五百石加增あつて先知の三百石と都合八百石を給とり番頭を申付られ苗字も改め大川數馬と名乘らせらる數馬い先年誅せらるべき身を殿のゆなさけによりて一命を助けられ友右衛門へあづけ給ひし事武術稽古とさせんとのお慈悲こゝろおりしかば數馬そのゆめぐみによつて劍術兵法に達しそのうへ友右衛門が智畧によつて敵横山閻書が實否も明白よあらとれたい父十内が横死のわけを糺すまでにありけるに友右衛門主君の爲めよ忠死ととげたる事殘念といいひながら兩人の命をたすけ給とりし先年の恩報じあれかさもあるべき事とおもひ居けるに友右衛門が名跡相續申付られるのみならず過分の加恩申わたされ役義も引あけありて格式よろしくありけるにぞ殿の厚恩廣大のゆ仁恐とい云あがらひとへに友右衛門が忠死によれりとおもへいよ〳〵悲しさ增りしかども此上いわれ又友右衛門にかわりて忠義のまことを盡さずんばあるべからずと夫より專ら大切に勤勞せしが敵討の事年頃の大願にして面体までもよく見覺へたりしかばるにとぞ父の横死の實否とたいさんものとおもふにつひて友右衛門が最期の覺悟せしときに近習をたのみわたし置たるかの遺書と數馬受取りて披見せしあ父の横死の實否いひとへに妹にたより尋ね問ふべしと認めおきたるゆゑ其詞にしたがひ彼處へ至りおきくに對面して友右衛門が忠死のおもひきをあく〳〵ものがたり此以後い母とも姉ともたのみまゐらもよし懇よまをしのべ扨事によそへて父十内が横死の事とたづ弥とひしかども是ぞとおもふことも

あかりけり

○第拾三回　天運循環して惡馬離を討り

偖も太川數馬い曩日よ友右衛門が引取りて本石町一丁目の裏家よ住ハせ病氣の療用をあさしむる妹お菊が方にいたりてさま〳〵のものがたりあぢし十内が横死の實否をさぐり出さんとすれども是ぞと思ふ手掛りもなかりしが又ある日も病氣見舞として我家をたちいで彼本石町一丁目なるお菊が養生處ゑおもむきこしかた行末のものがたりあどして申やうさてもわあた懶のは病氣い平愈の功驗し聊うあく嘸かしもぢかしく思されん若しは心に叶ふ療治の仕方もあらば如何やうある事よても遠慮あく語らひ給へそれがし事も友右衛門どのゝは陰ゑて過分の恩祿をたまとり立身出世仕るといへども外に親類とてもあく心細き身の上なれば只はもとさまとのみ友右衛門どのゝ代りとぞんじ居候得ば何事も隔てたまはず某しを實の弟とも思ひ忽易く本復の日を待るべしと世に頼母敷申けれバお菊これを聞てさて〳〵嬉しきは盲龜と聞し事かゑ自分とても外よ

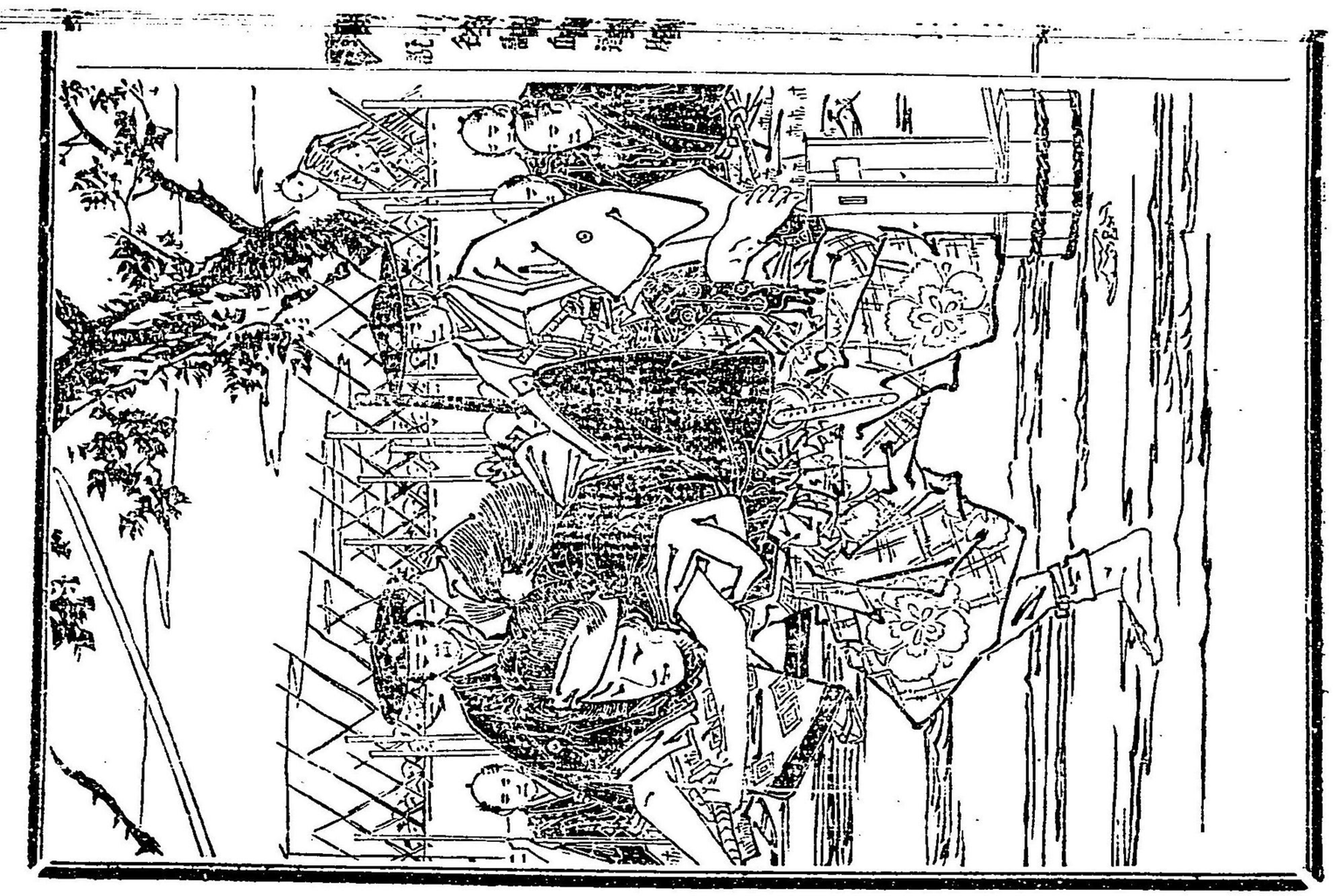
親しき人もあく兄友右衛門どのを杖とも柱ともたのみおもひ妾が先年伊南圖書といふ人のもとへ縁付きたる砌り心の限りたづねしかども知れざりしもゑ父母亡ありたる後ハ父母とも思ひ暮ひし友右衛門どのゝ行衛しれざりしかバ頼む樹の元雨もりてあゝろ細くかなしかりしよ媒の申さるゝゑハ女い三從のをしへありて幼少よてハ父母よ從ひ盛んとなりてハ夫に左たがひ老てハ子ゑ左たがふといふて一生涯人よしたがふ身ゑれバ親類ゑしとて苦しからず早く縁付して夫に從ひ中むつまじくゝらしなバ是に過さる事ハゐるまじとすゝめられ夫を力ゑ縁づきして四年の月日をおくりしゑ此業病ゆゑに離縁となり眞に三界よ家ゑき身とゐりしに久しぶりにて友右衛門どのゝは在家をきゝ出し嬉しさ飛びたつ斗り媒人より云々〳〵のよしまとしいれは世話をさのみ申せしよ斯のごとく養生所と修理下され重々の深き憐みを蒙け昨日の憂よ引かへて親船に乘たる如く心強くハ日を經過といつと平癒の期も去れがたき此業病あれバいかよして此は恩を報ずべしやと晝夜身を恨ていたりしにまた候其は恩をうけし友右衛門どのにお

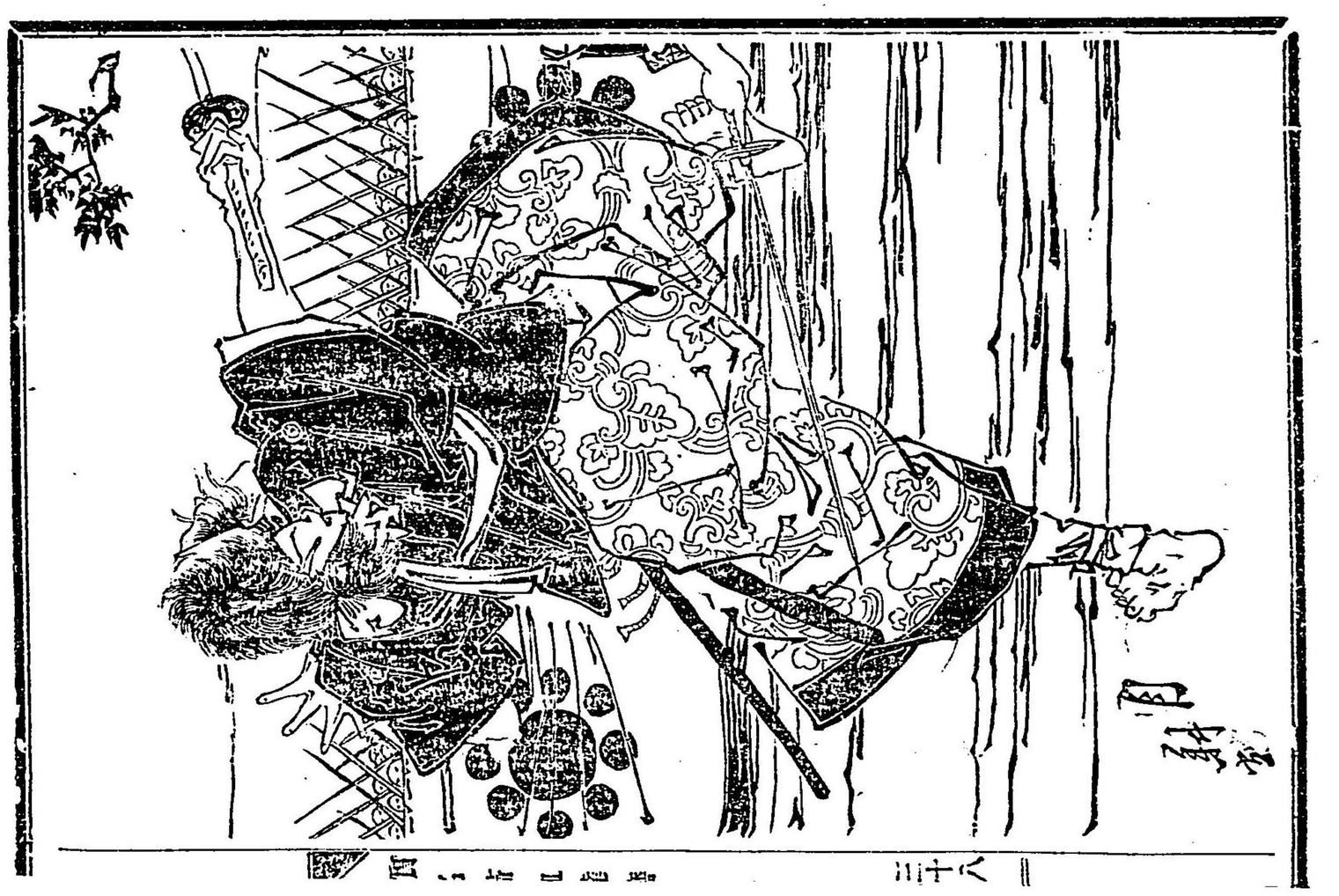
くれ參らせ今いたよるべきかさもあき身とあり淺ましくも無端あき事也とて涙たに袖も朽はてゝ深き歎きに沈みしにいまだ天道にも捨られざるよやぼ身が厚き志ざしを以て介抱あしくれられ友右衛門どのゝ居わする如くおおもはれ眞實の兄弟にもいやましうれしくおもひはべるあり所詮此難病本服すべしとおもいねゞいつまでおがらへあるべき其程もまれがたきに一生涯ぼ身の世話よある事やとこれのみ氣の毒に思ひばべれ又みづからがこの病氣をさだ先て淺間しくおぼしめすらんが是い前世の宿業にてもあらんずれども此病い全くみづからあせし所あり現世の兄友右衛門どのにさへあまりにはづかしく去ぞなき去わざ故あからさまにも語り侍らざりしが能き折あらば此病氣のいわれを明白にものがたらんとおもひし中にとや友右衛門どのにも別れまゐらせいまい其許より外に力とすべき人あげれゞ包みかくさんやうもあし序なから病氣の始終を聞せ申さんかの媒のすゝめよよつて四年以前立花の御家中伊南圖書殿へ緣付きして中ひつまじくゝらしよろこびおもひし所ある夜の寢ものがたりに夫圖書どの過きし越かたの事身のうへをはなされしがその中におそろしくおもひし事い圖書どの日頃秘藏せらるゝ刀ゆり備前祐定とやらん名作あるよしその刀に付て申されしいわれもと會津保科家ふ仕へて重恩のうけしものありしが或る年江戸下りの刀屋が會津表へ此刀と携へ來りしにいかにも名作あれゞこれを求めんとぞんじわが舅の何某へ聞合せしに曰くこの刀い名人といひ至極の出來ものあれ共燒刃あしくもし是を帶るとき持主に祟ると申事候へば無用あせよと止められしかどもさゞかりの名作無類の出來ものあれゞ一圖にはしく思ひしも名刀殿にかくしてひろうに求め置きしがまことに其刀の祟りにやある夜なにの故もなくわやまりて先妻を殺害せり殿よりは妹下されし妻女の事あれゞたとへ罪ありとてもみだりふ手にかけべき筈いなかりし事なるよいとんや聊も罪あくたいわが誤りて害せし事ゆゑ譯の手段もなくいまさら刀の咎ありとも言れず身の措きどあろ無きに苦しを兎や角案じおもふ所に平生まじはりあつき同家中の朋輩伊南十内といふものをりふし來りわわせしがわが不快の顏色を見て頻に去さいをたづね

られ返答にこまりしより風と悪心を起し彼十内をあざむき殺せし先妻おいよが密夫ありといひたて辯すべしとかやう〳〵に偽り先妻を殺害せし處へ十内をおびきよせ終ゐ十内を切殺して不義の密通と披露し其場いやうやくすませしが罪もあくうらみもなき兩人を手ゐかけしかゞ修羅の忘執と晴さし光んとて十内が怨恨をあぐさめんがためさてこそ横山の苗字をあらため今ゐ於て伊南と名乘る事い十内へのやわけにて九泉の下にてうらみをとらしくれよとの寸志ありしが光陰に關守あくもはや十余年におよぶといいへども思ひ出せゞ不便の次第ありとあが〳〵しくものがたられしを聞しがその刀いまに秘藏あるによつて自からもまさ先妻の如く其刀わて殺さるゝ事もやとそゝろおそろしくおもひしかゞ一處よくらすこゝろもあく只何ともあしに離縁いたしさくふ〳〵暇をもらふ手段をなせしかども圖書どのみづからとわはれをくれられ離縁のやうずあらざるゆゑいよ〳〵底氣味わるく寵愛の先妻と手にかけられしとの事あれゞみづからを愛し玉ふもまた害せらるゝ端ならんと恐きりわ恐怖のおもひありしにある人いふにい漆の實に生半夏を加へ酒わひたして顔わぬるときにい忽ち面体見ぐるしくあるとの事を聞しゆゑ女の漏はかなるこゝろより自の顔見ぐるしくあらゞ自然と夫にわいそをつかされ望みの如く暇まくれる事あらんと一圖に暇と貰ひたきまゝにひそかに右の藥と調へもちひたるに藥の功驗著しろくまつこのごとくおもひまふけぬ癩病とありて聖書もかゝり髪もぬけ人のまじとりもあらぬ身とありしかゞ是といひたてゝいろ〳〵に手と盡せしかゞ圖書どのも是非おくおもいれけん終に離縁せられしかゞ漸くわいとまをとりされども平癒の期もしれぬ病をこしらへ一生の難義とある事もおもいざりし愚さよと後悔すれども甲斐ぞあさまことに自業自得とやらにてありつらんわあかしま人にあ語り給ひぞと病氣の由來をものがたりけれゞ數馬い最前より耳をすましてとつくと聞扨いと心中大によろこび年來の辛苦も今こそ實證をきゝ得さりと天よも昇る心地なりしが疎ろく胸を推鎮めさり氣あき体にてお菊あい何事をもつげずいろぎはせかへりそく時わ敵討の願書を玄たゝめ先年會津に於て横山圖書の爲めに横死なした

る父十内が當時の樣子幷にお菊がものがたりにて實證を得たる事ども委細に記して訴へげるところ大守越中守殿一覽ありて大ひよおどろきまた感心をしたまひ友右衛門が由緒もあれべよきゐ計ひ得さすべしとあつて即日保科家へ使者を以てやうすを申送られそのうへ細川どの保科家へ參られ中將正之卿へ對面ありて玄ばらく面談のうへ兩家より立花和泉守殿へ使者を立られ横山圖書と申もの當時伊南圖書と中て貴殿方に勤仕いたしまかりあるよし、右いかやう〳〵の子細これありし身分に付申請度段申入られけるに立花どのにも武門のならひ是非なく承知ゐつて圖書を呼び出され兩家より使者を以て申越れし趣き申渡しこれあり其坐より直に網乘物ゐのせて保科家へおくられけりさて此一件い元來保科家にて先年詮義たゝざるところありけるによりて敵討の義い會津表に於ていたさせさきよしを細川どのへ申送られべ細川どのゐもそれこそ敷馬が故郷の事ゐて武門の面目なるべしとさつそく御許容あり殊さら大守正之卿にい幸ひ歸城ゐゆけるとりからあれべ敷馬い中將どの〻御供の中に加いり江府を出立せしが中將どの〻御人數程ゐく會津へ到着ありて大守より早速諸役人へ命せられ城下の廣野へ方五十間四方に矢來とゆひ廻し桟じきをかけ嚴重に用意ありしなり扨定日ゐもありしかべ東の方より大川數馬今年廿才そのいで立にい白綾の薄ものに淺黄羽二重の小袖を着し玄ん〻の糸ともつてたすきとし細川どのより賜りし大小を帶し白綾の頭巾してさもりゝしく出立て敷皮ゐこそ坐したりけるもとより無双の美男あれべ一しは美々しく見えにけり西の方よりい横山圖書今年四十九才せい高く色白く人品骨柄勝れし武士數馬同樣のいでさちにて圓坐にこそい坐したりけれ桟じきの正面ゐい保科正之卿左右にい家老用人其外家中の歴々伺公して見物そ右の方の桟敷にい細川の檢使堀尾帶刀其外物頭與力足輕五十余人その餘い數馬を守護しひかへけり誠に晴れある敵討とぞ見へたりけり時に會津の役人より三方に土器昆布勝栗をのせて口祝ひとして數馬に給いりけれべ數馬これとおし頂き身づくろひしてまち居たり圖書へい小四方に土器のみありし時に兩人面見合せ數馬い桟じきの正面へ禮義をなし扨横山ゐむかひやう某い陪邊が

ために欺て討れさる伊南十内が二男よて主命お依て大川友右衛門が名跡相續せしに依て今い大川數馬と申あり實父伊南十内ハ邊の爲めに横死をとげたる折い某龜之助と号しやう〳〵五才の幼稚あるに依てハ邊の面体をも見知り得ず去りし俱お天をいさいかざるの仇あれバ此年月艱難辛苦して漸邊の在家をたづねしかど捜索め得ざりしが先頃大川友右衛門が斗略を以てハ邊ハ對面し實否を糺したりしかバハ邊ハも定めてハ見知りあるべしすでお横山どのと承りて通すべきにあらねども實父十内が横死の子細明白ならざる中い名乗りかゝりて討事あたゝずよつて是まで殘念あがら默止し置ぬる所あり然るに此たび委しく露顯ゐおよびしによつて主君お願ひ今日只今勝負の場に臨ふ事年來の本望大慶あれにすぎずと申けるにぞ圖書い莞爾とうちわらひてさすがい伊南十内殿のハ次男龜之助どのにてありつるにや天晴の生立勇々しくも申されし今の一言感心せり此年月のハ辛苦さつし入申あり十内殿を手お かけしも別に意恨ありての事あらねどもハ邊のためにいともに天をいたゝかざるの敵ありいざ某が首を討て亡父の墓ハ手向られよと申ハにぞ數馬聞て仰までもあし貴殿のハ首をうけて父の讐憤を散せんことそれがしが手の裏にあり隨分ハはたらきあつて後日のものわらひなきやうにいたさるべし用意よくバ立合申さんと禮義の挨拶もおとりて双方矢來の眞中にたちむゝいて數馬改めて本名伊南十内が次男龜之助あり親のかたきおぼへたるかと太刀ぬきかざし討てかゝれバ圖書いこゝろよくうなれんと欲するにや刀を扳きしかどもふみこんで乃と合す体なかりしに數馬聲をかけていかに横山どのいまさらハ覺悟の体見苦しくこそへ歴負い時の運なるべし尋常に戦ひたまへたゝしいおくれたまふにやと申けれバ圖書い首尾よくうたるゝ了簡ありしかどもあまり手もあくうたれん事孝子の心ざしを無にするありとや思ひけんもとより劍術手練の圖書數馬が若年にて武藝手練のほどおぼつかあしとおもひて二三合たゝかふ心にてわざと聲とはげましわが猶豫せしいハ邊の心中をさぐらんためあり健氣にも申つるものかな去かし若輩の侍邊片腕にもたらざれども志の去ほらしさにわが手にかけて十内のおわする黄泉へ遣とすべしといひも





はてず打てかゝりしかゞ數馬忍得たりと飛さつて請あがし一往一來朧々實々双方手練の太刀さゞき一上一下ときり合ひしが横山い數馬がはたらきを見て大ひに感じよくも熟せしものかなとて忍の中に稱美なし頻りに挑み戦ひしが數馬がいらつて討つ太刀をうけはづして横山肩先四五寸切込れさぢろく處を數馬い得たりと踏こみ〳〵たゝミかけて難あくきり伏せさりしゞ忍静かに元の數皮ゑ坐して平伏せりよつて保科家より苦しからぬとゞめをさすべしと下知ありしかゞ數馬やがて立出て機數へ一禮なし見事にとゞめをさしたりけり大敵の横山をやす〳〵と討あふせしかゞ見物の諸士おもいず聲を發して感稱せるその聲去ゞらく鳴もやまざりしかくて敵討ち首尾よく相濟數馬い年頃の本意を達して悦ぶ事かぎりあく保科家にても數馬がはたらきを感心ありて十内が悴なれゞ再びめしつかひさくおもとれ細川家へ所望ありしかども越中守どの數馬い友右衛門が代りなりとて斷りやされ則堀尾帶刀その外諸役人數馬を守護して江戸へ歸着し大守越中守殿へかくと披露したりけれゞ細川どの機嫌なゝめならず數馬を呼び出し天晴の手柄あり當家の面目これに過ずとて既に褒賞として三百石加増を給ひり都合千百石となり家富み榮へて長く細川家に忠を盡し繁昌せしとぞ是しかしながら友右衛門が信義の厚さと數馬が孝忍と天道憐れみ給ひ宿志を遂げて目出度春を迎へけるありめでたし〳〵〳〵

坊間に流布する寫本或ひい劇場又い講談等にい大川友右衛門數馬が艶色ゑ迷ひ情を通じて兄弟とあり其のち細川家ゑ仕へて祝融のため灰燼となる可きお家の重寶達磨の一軸を火中に入て取出せしと云やうに作りたれども是い甚だしき誤りにて當時憚る處あるゆゑ御朱印と云ず仮に一軸とせしあり亦數馬に通せしと云ふ説も架空の妄説にして友右衛門が一世の義勇を見數馬が忠孝全さを見ても恁る無道の品行無りし事明らかありと或人の云へるが頗ぶる道理あれゞ併せて茲に記しおくあこそ

實説名畫血達磨下之卷終

拜告

編者繁彦此書の補綴を承諾ひし時折節小恙に罹りて身体殆ど脳みしかども推て燈下に稿を起し一枚草もれば一枚を投じ僅かに七八日あして漸く其責を免れたり恁れば書もまた是と同じく夜を以て日に繼ぎ前は板元ありて出版の遲れん事をはのめかし後へに職工あつて跡いくの催促恰も火攻の如きともて意匠を盡す事能はず大ひに雅趣を失ひたる靡尠あからず今その一二を挙れば第三回圖書最愛の女房を殺害する處圖書の臥房よありたりと有る本文によれば袴を穿ちたるも不都合あり亦第五回敷馬が細川公わ拜謁する處薄茶を泰呈るに帛さと用ふるい如何ばらん歟繁彦り月耕も茶事を知らざれば甚だ阻りて其他猶あまた有るべし是い先にも云ふ如き板元の注文烈しきに依りて編者も書工も煙にまかれ深く考へ正すに遑ぞあく効成るに及んで之を見之に驚くも今さら奈何ともする能わず止む事を得ず其儘發賣致したる事由なれば卷中本文わ誤りの多きと書圖に違へる靡のある事い幸ひにも宥しあつて浮愛諧を願ひ上ます

編者　柳葉亭繁彦
書工　尾形月耕謹述

柳亭種彦閲

○復讎浮木龜山　尾形月耕畫　繪入上下二冊　定價金六拾錢

柳亭種彦戯編

○春色黄金花　望齋秀月畫　繪入全一冊　定價金三拾錢

柳亭種彦閲

○朝顔垣殘秋月　朝霞樓芳幾畫　繪入上下二冊　定價金五拾錢

柳亭種彦著

○花兄譽片腕　歌川國梅畫　繪入全壹冊　定價金廿五錢

元祖柳亭種彦著

○涙手摺昔木偶　尾形月耕縮圖　繪入上下二冊　定價金六拾錢

柳亭種彦著

○御伽話手遊八景　尾形月耕畫　繪入上下二冊　定價金四拾五錢

柳亭種彦著

○蝶鳥筑波裙摸様　朝霞樓芳幾畫　繪入上中下三冊　定價金四拾五錢

柳葉亭繁彦著

○世者情浮名横櫛　尾形月耕畫　繪入全一冊　定價金三拾錢

東京圖書館

新書門

部類函架號冊